
呼ばれて飛び出た魔王です。（勇者付き）

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼ばれて飛び出た魔王です。（勇者付き）

【Nコード】

N6173E

【作者名】

髭伯爵

【あらすじ】

ある日、魔術が使える高校生八神真は、兄の行った召喚術に巻き込まれ異世界の魔王を呼び出してしまふ。さらには勇者まで呼び出され、彼の日常は騒がしいものになっていく。「腹が減ったぞマコト。」「すずすずしいなお前!！」

第一話：嵐の前の台風。（異世界編）（前書き）

どうも、作者です。

何故か今書いている作品を書くことが出来なため、新しいものを書いてみようと思いました。

この話もコメディ路線を目指します。

第一話：嵐の前の台風。（異世界編）

ここは、日本でもなければ地球にあるどこの国にも当てはまらない世界。さらに言うならば、ここは地球ではない。

ここは我々が住んでいる世界とは違う異世界。〈アーミアン〉と呼ばれる世界である。

周囲の大地は荒れ果て、空は年中雲に覆われている。生えている草木も、どこか青々しさを感ぜられず、全体的に生命の明るさを感じられない。

さらにはこの世界でも一番多く凶暴なモンスターが現れる土地だ。この世界で北部に位置し、大陸から離れた巨大なこの島を、人々は闇が住まう土地、〈ヨルムンガルド〉と呼んだ。

一見とても人間が住めるとは思えないが、このような所でも人間は暮らしていた。

いや、それが厳密に言えば人間とは違う生き物だからこそ、このよ
うな土地にいるのかもしれない……。
彼らは〈魔族〉と呼ばれていた。

「ふ〜む……。」

ヨルムンガルドのほぼ中央にあり、代々この土地を治める者が住む城、<グラスター城>。その中の執務室にて、1人の女性が唸っていた。

腰まで伸びた綺麗な銀髪に、雪のように白い肌、澄んだ藍色の瞳に整った顔立ち。10人中10人が絶世の美女と言いそうな美貌を持つ女性は、その端正な顔を不機嫌そうに歪めて唸っていた。

彼女はしばらく唸っていたが、やがてポツリと呟いた。

「……退屈だ……。」

アーミアリアンに住む全ての魔族を纏め、このヨルムンガルドの支配者でもある第34代目魔王のパミラ・リライス・エンディーク・グラストーは、非常に退屈していた。

彼女の仕事は何か重要なことを決める際に最終的な決定を下すことと、書類に目を通し許可のサインをしていくことだが、彼女は非常に事務の仕事を得意としているため、すぐに終わってしまうのだ。そしていつもこうして暇を持て余してしまうのだ。

彼女が退屈しにぎにペンを高速で回していると、執務室のドアが叩かれた。

「……入れ。」

彼女は残像が残るほどのスピードで回していたペンを机に置くと、入り口にいる者を中へ入るよう促す。

「失礼します。」

そうやって入ってきたのは、メイド服を着た少女だった。彼女は小脇に抱えていた書類を開くと、今日の報告をしていく。

「本日は内地からの襲撃も無く、平和な1日でした。・・・ああ、食堂で乱闘騒ぎが1件ありましたが、あれは料理長とベル隊長が新メニューについて口論になったのが原因のようです。」

「あの2人は喧嘩ばかりだな。そろそろ何かしらの対策を考えねばな・・・。」

ベル隊長とは、この城を守る警備隊の隊長で、城内でもかなりの実力を誇る。だが独特の味覚を持つため、料理長とは犬猿の仲。

「まあ、ベルはかなりの甘党だからな。」

「・・・ベル隊長が作った料理は本人以外がお食べになると次の日確実に寝込みますから、料理長としては絶対に認めないでしょう。」

因みにベル隊長とやりあった料理長は城内で最強と言われる人物。彼の機嫌を損ねると飯をとんでもないモノにされ、完食しないと次の日から飯を作ってもらえないためベル隊長以外は魔王ですら逆らえない。

その後、城内についての報告を終えたメイド服の少女は退室しようとしたが、ドアに手を掛けると魔王の方を向いた。

「魔王様。最後に一つ言っておきたいのですが・・・。」

「ん？何だイース？」

「・・・何故、男である私にこのような格好をさせるのですか？」

そう、実は彼女こと彼、イースは男なのに魔王の命令により、城内ではメイド服を着ることを強制されていたのだ。

イスの言葉に、魔王はさも当然のことのように告げた。

「それはお前が可愛いからだ。」

「私は男ですよ!？」

「そんなことは気にするな。」

「気にします!!!」

「安心しろ。その内本物にしてやる。」

「もっとやです!!!」

しばらくそんな感じの言い争いが続いたがやがてイスが根負けし、最終的には城内で祝い事にのみということで落ち着いた。それなりに長い時間言い争っていたのでイスは少し疲弊していたが、魔王の方は平然としていた。

「それではこれで・・・。」

「ああ。ご苦労さまだ。」

魔王の労いの言葉を受けたイスが退出しようとしたとき、突然轟音が響いた。

「!?!? 魔王様!!!」

「ふ、どうやら懲りずにまた来たようだな。」

魔王は獰猛な笑みを浮かべると、目の前に手をかざす。すると、掌から光が溢れ、魔王の体を包み込んでいく。

これが彼等魔族の1番の特徴である<魔法>である。

普通魔法を扱うには魔力が必要なのだが、人間の中で魔法を扱えるほどの魔力を持った者は中々いない。

しかし、魔族は誰もが魔法を扱え、しかもその練度も高い。

魔王の体を包んでいる光は、遠くへ移動する魔法であり、行き先はもちろん先程の轟音の発生源だ。

「私は相手をする。後始末は頼むぞ。」

「分かっています。くれぐれも気をつけて下さい。最近シラスト王が不審な動きをしているとの情報が入っています。」

「あんな臆病者に出来ることなぞ知れているがな。」

魔王は嘲笑を浮かべて大陸一の権力者であり、魔族にとって一番の敵である男の顔を思い浮かべ侮蔑の言葉を漏らす。

そして光が完全に魔王を包み込み、その光が無くなると、魔王の姿は無くなっていた。

魔王が光とともに現れたのは、城の正門前だった。

既に警備隊と侵入者との間で戦闘が行われていたようだが、近くには傷ついた警備隊の者が倒れており、侵入者の実力がかなりのものだということが容易に想像できた。

魔王は倒れている警備隊の隊員の1人に話しかける。

「大丈夫か？」

「な、何とか……。それより魔王様。侵入者は……。」

「分かっている。“勇者”なのだろう？」

「は、はい。」

隊員の返事を聞くと、魔王はさらに戦闘が行われている所へと向かっていく。

すると、ベルが侵入者によって吹き飛ばされているところだった。

侵入者は城の外壁を破壊して気絶したベルには目もくれず、両手に

持った両刃の剣を構えて魔王の方を見る。
魔王はどこか呆れた様子で侵入者に話しかける。

「全く……、あれだけ完璧に負けたというのに、懲りずに来るとはな。」

「……あなたを倒すまで、何度でも戦う……。」

勇者の方は、感情を感じさせない声を返す。勇者は鎧を着ており、顔は頭部を完全に覆っている仮面が付けられているため、人相はおろか性別すら正確には分からない。但し、声はまだ成人していないくらいの年齢の女性のものだったので、おそらく女性と思われる。魔王は手に魔力を集め、小振りの剣を作り出すと勇者に対して最後の警告をする。

「これが最後だ。大人しく帰れ。」

先程とは違い、完全に殺気を出して勇者に対してプレッシャーを与える魔王。しかし勇者は怯む様子も見せず、無言で剣を構えている。その様子を見た魔王は大きいため息をつく、顔から表情を消して戦闘モードに入る。

2人はしばらくにらみ合ったまま動かなかった。その時、突如として周囲に風が吹き始めた。魔王はその風を不審に感じる。

（おかしい……。この風は普通の風では無い……!）

（……風に変な力を感じる……。魔王の仕業じゃないみたいだけど一体……?）

勇者も同じく突然吹き始めた風に警戒していた。

すると、突如として風が2人に襲い掛かり、その風に光が混ざり始める。

「な!?!」

「!?!?!」

魔王も勇者も突然の暴風に身動きが取れず、ただ叩きつけられるような風にされるがままになるしかない。

次第に光が周囲を飲み込んでいき、2人の体がゆっくりとだが消えていく。

そして目が眩むような強い光が周囲を照らし、その光が消えると、魔王と勇者の姿は消えていた。

場所は変わって現代の日本。

季節は春。学生にとって進級や入学などのイベントがある季節。とある住宅地を1人の高校生が歩いていった。

「ふあ~~~~ねみい~~~~。・・・。」

大きな欠伸をしている彼の名は八神真^{やがみまこと}。今年で高2になる少年だ。

僅かに伸びている黒髪を後ろで束ね、首には黒い石が埋め込まれた首飾りをしていた。

「早く帰って昼寝でもしてよ……。」

今の時間は午前11時なのだが、今日は始業式だったので早めに帰ることができた。彼はとりあえず昼寝をするようだ。やる気を感じられない足取りで家路についていたが、彼は知らない。
……これから起きるとんでもない出来事を。

第二話：嵐の前の台風（現代編）

八神家の長男騒来と次男の真は、他人には決して知られてはならない秘密があつた。

・・・それは“魔術”と呼ばれる超常の力を使えるということだつた。

兄は日々の退屈を紛らわすため、弟は自分の大切な物を守るためと、兄をボコるために魔術を会得していた。

「・・・何でウチからすごい光が出てるんだろーなー？」

俺は学校から帰宅し、家の前に来ていた。

すると、二階のある部屋から光が発生しているのが視界に飛び込んできた。

・・・あの部屋は兄貴の部屋だから、あのロクデナシがまたアホなことをしているんだろう。とりあえずとっ捕まえて吊るし上げだ。俺は額に青筋を浮かべて自宅に入る。別にキレテナイすよ？

家に入り、愛用しているリュックをリビングのソファソファに置くと、この家一番のトラブルメーカーであり、俺の兄貴である八神騒来やがみそつこの部屋に直行した。

「このくそ兄貴！ 今度は何やってやがる！！」

怒声を上げながらドアノブを掴むが、何故か扉は開かなかつた。

「チイイ！ <ロツク>掛けやがったな！！」

ドアに施錠の魔術がかけられていることに気づいた俺は、その呪文を解除するため掌をドアにかざす。

「解除せよ、<アンテ>！！」

俺が開錠の呪文を唱えると手から生じた光がドアノブへと向かい光がドアノブにぶつかって消滅すると、ドアから緑色の光が散っていった。

兄貴の呪文が解除されるのを確認すると、俺は念のため中の様子を確認するため目元に手をかざすと探査の呪文を唱える。

「我に真実を見せよ、<フォーラ>。」

光が目元へと吸い込まれていくと、俺の目は部屋の様子を透視によって確認していく。

部屋では兄貴が魔法書を片手に、床に描かれた魔法陣に向けて呪文を唱えていた。その呪文に覚えのある俺は顔色がどんどん悪くなっていく。

しかし今部屋に突入すると何が起こるか分からないため、俺は部屋の様子をチエックしつつ、何か突破口がないか考え込んだ。

すると、部屋から突然膨大な量の魔力が溢れてきた。俺は確実に何か異常が起きたと確信し、部屋へと突入する。

中に入ると同時に魔法陣が光を撒き散らし、傍で呪文を唱えていた兄貴は俺の方へと吹き飛んできた。

「ぬおお！？ <ブレイク>！！」

咄嗟に前方に魔力で作られた壁を形成し、兄貴との衝突を避ける。

兄貴は壁に勢い良くぶつかり、潰れたカエルのような声を出して床に落ちた。なんか「グキツ」て音がしたけど無視無視。え？口から泡吹いてる？その内静かに冷たくなるだろ。

魔法陣は暴走しているらしく、中心には黒い球体が発生し、そこから強烈な風が吹き真を吹き飛ばそうとする。

真は顔を腕で庇いつつ、もう一方の腕を前にかざして呪文を唱える。

「我を災厄から守れ、<レアルド>!!」

呪文を唱えると、体を渦巻くように魔力による防護が働き真を風から守る。

真は召喚陣に近づくと、何故か吹き飛ばされずに落ちている魔道書を拾う。ページはあるページから動かず、そのページにはこう書かれていた。

「召喚術。」

.....

「またやりやがったなこのバカタレーーーー!!!!!!」

俺の絶叫が木霊した.....

ウチの兄貴は大抵の呪文が得意なんだが、召喚術だけはダメなんだ.....

過去2回に渡る召喚術は全て失敗したからな.....

（ここからは真の回想のためセリフのみになります）

一回目

「兄貴何やってんだ？」

「おお真。丁度良い所に来たな。今から召喚術を始めるところだ。」
「召喚術？」

「ああ。この魔法陣に呪文を唱えつつ自分が望む生き物を想像すると、想像したものが現れて使い魔になってくれるのだ。」

「・・・因みに何を呼び出すんだ？」

「最初だからな。ドラ エのスライムだ。」

「そんな著作権に引つ掛かりそうなモン呼ぶんじゃねえ!!」

「うるさい！ケター・イム・ヒムラー・・・。」

「おまつ止めろって!!」

「・・・ヤース・ヤース・ホウラー!!! いでよ、スライム!

!!--!!」

「ぐおお!?何だこの光!？」

「む、どうやら何かいるようだぞ?」

「・・・ちよつと待て、あのゲル状のモノはなんだ。」

「・・・スライム?」

「ド クエのスライムはあんなドロドロじゃねえだろ!! 何呼んだんだよお前はア!!!--!!」

「待て、その手に持った辞書を下ろすんだ!・・・って何でスライムくん(仮名)が足に絡み付いてくるんだ!? これじゃ逃げられん!!--!!」

「よくやった!! 後は任せろ!!--!!」

・・・この後大爆発が起こり、兄貴をリビングで磔にした後一晩掛けて後片付けしました。

俺の脳内で今までの召喚術の結果がまざまざと甦り、俺は魔道書を持つと、召喚陣の暴走を止めるため召喚術の呪文を唱えていく。

・・・どうか収まりますように！

第二話：嵐の前の台風（現代編）（後書き）

作：このあとがきでは話に出てきた魔法・魔術の説明を行います。
それじゃあ騒来、よろしく。

騒：うむ、任せろ。

<ロック>

本来は物を固くする呪文だ。俺はそれを応用してドアノブを固めて動かなくさせてドアを開かなくさせるんだ。

<アンテ>

これは別の呪文の効果を消し去る呪文で、これで俺の<ロック>の呪文を消し去ったんだ。

<ブレイク>

魔力を凝縮させて壁を作る。物理的な攻撃や魔力が込められた攻撃も防げる。壁をそのままにして足場や鈍器に出来る。俺はこれでぶっ叩かれたことがある。

<レアルド>

体に魔力の加護を与えて防御力が増す魔術だ。因みに何故か攻撃力が上がっているわけでは無い筈なのに、この呪文の効果が働いているときに殴られるとかなり痛い。我が身をもって立証済みだ。

騒：まあこんなものか。

作：途中で体験談が入ってたな。

騒：体験だ。

作：……いつも何やってんだよ……。

魔王：私はまだか！！

勇者：……出番まだ……？

第三話・ついに嵐がやってきた。(前書き)

くそっ、文字が多く書けない・・・。

しかし、その時奇妙なことが起きた。

光から1本の糸が私に向けて差し出されたのだ。手元まで来たそれを躊躇うことなく掴む。

するとどこかに引つ張られるような感覚と共に私の意識が薄れていった。

「ここは・・・どこ・・・？」

私は見覚えの無い場所、いや空間を漂っていた。いつから漂っているのか。いつまで漂うのか。どちらも分からなかった。

自分が勇者として魔王と戦おうとしたとき、突然光に包まれ、この空間に飛ばされたのは覚えている。しかし、ここがどこなのか、何故ここに飛ばされたのかなど、分からないことが多かった。

周囲には誰も居ない。そんな状況で私が思ったのは、とても意外なことだった。

「・・・寒い・・・。」

別に気温が低いわけではない。そもそもこの空間には気温があるかどうかすらも怪しいのに、それでも何故か寒いと感じてしまう。

何故かと思いきその理由を考えると、既に答えは周囲に現れている。

人間のぬくもりが無いのだ。そして私は気づいた。寒気は体ではなく、自分の心がそう感じていることに。

私の心は孤独と不安で潰れそうになる。危険なことは幾度もしてきた。盗賊一味を1人で全滅させたこともあったし、一息で町1つを焼き尽くすドラゴンと1人で戦ったこともあった。

「イヤ・イヤ・ハッラー・・・」

さつきから召喚術の詠唱をして既に1時間が経過していた。俺は魔法術の使い過ぎにより既に疲労は限界に達していた。しかし魔法陣は未だに安定せず少しでも詠唱を止めれば何が起こるか分からない状況だった。

兄貴はさつきから動かず、家の地下室で寝ているであろうゲル君（兄貴の呼び出したスライムのこと）を呼ぶことも出来ない。

しかもさつきから召喚陣の上に発生している黒い球体から声がするんだ。

女性と思われる雄叫びに、とても小さな助けを呼ぶような声。

何が何でもそいつ等を助けねえと。おそらく召喚した兄貴のせいで巻き込まれたのだろうから。

「ハー・ミルクリウス・ケセロー・・・。」

そもそも魔法術においての詠唱は呪文を起動させるためのものと、呪文の効果を高めるものの2つがあるんだ。

召喚術の詠唱は後者で、詠唱が長いほど強力な使い魔が出てくる。

しかし、既に魔法書に書かれている召喚術用の詠唱はあと少しで全て読み終わってしまうのだ。

何度も失敗してんのに何で強力な奴呼んだんだよ・・・。自分の実力ぐらい知っとけ！

俺は心中で兄貴へ呆れ帰りつつ詠唱を止めない。

そしてついに詠唱が終わる瞬間になった。

「・・・ライ・ライ・ケッセル・バセナー！！！！」

最後の詠唱が終わると同時に俺は膝をつく。そのまま倒れそうになるのを何とか気力で耐えると召喚陣を見る。

召喚陣の上で展開していた球体が突如として大きくなり、俺は疲労で呪文を唱えるどころか動くこともできず、ただ目を絶対に閉じないようにしようと思っただけだった。

黒い球体が俺に触れると、何かが俺の中に入ってきた。

体ではなく心に直接侵入されたような感触を不気味に感じていると、突然頭の中に謎の声が聞こえてきた。

身体状態・・・良好。

精神状態・・・良好。

魔力最大容量・・・最低必要容量突破。

魔力安定値・・・良好。

ソウルタイプ・・・良好。

契約執行。

「な、何だコレ・・・ぐあああああああ!!???」

突然頭の中に浮かんでくる言葉に戸惑っていると、いきなり激痛が走った。

言葉では言い表せれない程の激痛。しかも普通とは何かが違う。まるで精神に無理やり何かを繋げているような痛みに俺は声を上げた。

「がああああああ!!!!」

声を出さなければとても耐えられそうにない激痛はしばらく続いた。ようやく痛みが引いていくと召喚陣から光が生じ、何かの形を作っていく。

「・・・今度はなんだ？」

もはや体を動かすことも出来ず、俺は見ていることしか出来なかった。

光は段々と二つに分かれていき、それぞれ人の形を作っていく。そして一際大きな光が俺の視界を遮った。

「うお!？」

咄嗟に目を瞑ると、すぐに光は消えたらしく、俺は恐る恐る目を開ける。

そして俺は視界に飛び込んできたモノを見て絶句する。

「うっうっ・・・。ここは一体・・・？」

「・・・。」

召喚陣には、銀髪の美女と鎧を着た赤い髪の少女が倒れていた。

・・・。。。。ナニコレ？

第三話：ついに嵐がやってきた。(後書き)

作：さて、今回も役立たずの騒来に解説をやってもらう。

騒：・・・俺の扱いが酷いぞ。

作：うるさいな。口答えしたら出番減らすぞ。

騒：すいませんでした！

作：良い良い。分かったのならとっとと解説をしろ。

騒：では今回は魔法と魔術についての説明をしよう。

魔法と魔術の違い。

魔法とは術者自身の魔力のみを使う。だから魔法を使うと身体的な疲れを感じる。生まれつき人間の魔力の最大量は決まっており、個人によつては魔力が足りなくて魔法が使えない奴がいる。

あと魔法は魔力を変質させて火や水に変えたり出来る。

魔術は自分の魔力に加えて周囲の物や自然に宿っている魔力を体内に集めて使用する。魔力の絶対量が少なくても扱えるが、魔力を集める才能が必要だ。

魔術は設定された呪文を唱える他に周囲の自然に魔力を送り込んで火や水を操るから、周りの影響を受けやすいな。

騒：ちなみに呪文の詠唱をするのは魔術だけだ。魔法は魔力の量がそのまま威力に繋がっている。

作：へくなるほど。結構違いがあるんだな。

騒：次回ではようやく俺が起きるから、楽しみに待っていてくれ。

作：まあ酷い目に合わすがな。

騒：・・・マジか？

作：それでは～～。

騒：待て！笑顔で手を振りながら走り去るな！！ 待て～～～～！！！！

第四話・とりあえず話してみよう。(前書き)

ネタが〜。ネタが浮かんで消えていく〜。

3秒以内に消えていく〜。

・・・ダレカタステ。

第四話：とりあえず話してみよう。

さて、状況を整理しよう。俺の目の前には信じられない光景が広がっている。

まず使い魔を呼び出す召喚陣の上に、2人の女性が倒れている。

1人は腰まで伸びた長い銀髪に、澄んだ藍色の瞳。すらりとした長身に抜群のプロポーションの体は黒いドレスに包まれており、正直とても綺麗だと思う。

彼女は辺りをキョロキョロと見回しており、何が起こったか分からないようだ。

もう1人はツインテールの赤い髪をしており、顔立ちから俺と同じくらいの年齢だろうと思うが、何故か俺より頭1つ分小さい体に鎧を着ており腰には2本の剣が差してあった。

どうやら意識は無いらしく、目を閉じたまま眠っている。
・・・さて、どうしよう？

コマンド

戦う

話す

アイテムを使う

逃げる

「え〜と、怪我は無いか？」

「む、大丈夫だ。私の体は鋼鉄より固いからな。」

「・・・いや嘘だろ。」

「ばれたか。実はダイヤと同じなのだ。」

「さらに固くなった!？」

・・・結構フランクな人だな。一体何物なんだろう？　そもそも元凶である兄貴はまだ起きないのか？　今日の晩飯何にしよう？

「・・・おい・・・聞いているのか？・・・おい！！」

「ハッ！？　わ、わりい。なんか現実逃避してたわ。」

あぶねえあぶねえ。あまりの事態に脳が無意識のうちに現実逃避してた。

俺は聞こえてきた声のお陰で正気を取り戻した。話しかけてきたのは銀髪の美女の方だった。魔法陣から離れて俺の隣に座っている。どうやら反応が中々帰ってこなかったからか少し不機嫌そうだった。とりあえず俺は自己紹介をすることにした。

「え〜と、俺は八神真^{やがみまこと}だ。アンタは？」

「私を知らないのか？　私はパミラ＝リリス＝エンディーク＝グラストー。第34代目魔王だ。」

「・・・すまん、もっかい言ってくれ。なんか妙な単語が入ってた気がする。」

「だから、私はパミラ＝リリス＝エンディーク＝グラストー、第34代目魔王だ。」

魔王？　ンなばかな・・・。今は現代の日本だぞ？　今時そんなことは・・・。

そこまで思ったところで俺にとある可能性が閃いた。それは俺がこの時代に住む魔術師だからこそこんなにも早く閃いた可能性だった。まさかとは思いつつ俺は確認をとることにした。

「なあアンタ。」

「パミラで構わないぞ。私もマコトと呼ばせてもらおう。」

「・・・じゃあパミラ。日本という国を知ってるか？」

「どこだそこは？」

「じゃあアメリカは？」

「知らない。」

「それじゃあパミラの住んでいた国は何て所だ？」

「ヨルムンガルだ。・・・まさか知らないのか？」

「そんな国、俺は知らないぞ。」

その後も、確認作業は続いた。

「世界最大の国は？」

「ジャカーム。シサイヤ大陸にある。」

「有名な宗教を一つ言ってみろ。」

「カース教。世界を一度滅ぼした悪魔を退治した者達を信仰する宗教だ。」

「・・・何か自分のこと話してみる。」

「私には女装趣味の部下がいる。」

「多分嘘だろ。」

「私はマコトより偉い。」

「態度はな！」

「マコトは私の体が目当てだ。」

「名誉毀損で訴えんぞ！！」

・・・何度質問をしてもこちらの世界には無いものが出てくる。一部明らかにふざけてきたがな。どうやら俺の考えは当たりのようだ。な。

パミラを見ると、どうやら互いの常識が食い違うという状況を疑問に思っているらしく、しきりに呟きながら考え事をしていた。

「むむう・・・一体何故だ・・・。」

俺はあんまり気の長い方じゃないので、自分の考えを話すことにした。

「多分、ここはお前の知ってる世界とは別の世界だと思う。」

「・・・どうゆうことだ？」

パミラが全く理解できないといった風に首を傾げる。

「こいつは仮説なんだが・・・俺の兄貴は多分かなり強力な使い魔を召喚しようとしたんだと思う。でも、魔術による召喚は強力なものと呼ばうとすると術者の精神力が大抵もたないんだ。兄貴もそれで最初に倒れたんだ。」

俺は部屋の隅でうつ伏せに倒れながら首は160度ぐらい回転したまま転がっている兄貴を指差した。つーかいい加減起きろ。

「・・・その話が本当なら、何故私は召喚されたのだ？」

「・・・兄貴が気絶した後、召喚陣が暴走を始めたんだ。そのままだとやばそうだと思ったんで、俺がそのまま続けたんだ。多分そのときに、2種類の魔力が流れ込んだために召喚術にバグが生じたんだ。それで別の世界に居るお前らの元に召喚術が発動したんだ。」

「そして私達は暴走した召喚術に巻き込まれ、使い魔としてここに召喚された・・・というわけか。」

「ああ。」

「ふうむ・・・。」

パミラは突然掌に魔力を集めると、それを空気中に放つ。

空気中に放たれた魔力は2本の糸を作る。糸はそれぞれパミラと鎧を着た少女へと伸びており、2本とも俺の体と同化していた。

「なんだこりゃ？」

「<コード>だ。使い魔と主は契約の際に魂が繋がる。これは魂を繋げている糸だ。これがあるという事は……。」

「……2人とも俺の使い魔になっちまったってことか……。」

試しにコードを掴もうとするが、何度指でつまもうとしてもすり抜けていく。どうやらただの紐じゃないようだ。

「しかし、別の世界に飛ばされるとは……。中々面白い体験だな。」

「面白いで済ましていいのか？ ここにはお前の家族やお前を知ってる奴はいないんだぞ？」

こいつ結構大物だな……。あ、そっぴや魔王つってたしな。大物か。

俺の呆れた口調で返すと、パミラは少し嬉しそうにしながら話して来た。

「向こうではいつも同じことばかりで退屈していたからな。むしろ楽しそうだ。」

明るそうな様子から、嘘や見栄ではなく本心で言ってるみたいだ。見知らぬ土地にいきなり飛ばされて不安になってるかと思っただけ大丈夫みたいだな。

俺は心の中で安堵する。さすがに自分の所為で他人が不安になったりするの嫌だからな。

「それにマコトはいい奴みたいだからな。使い魔になっても大丈夫だろう。」

「……どうしてそう思うんだよ。実は極悪人かもしれねえだろ？」

「最初に怪我の心配をしてくれたし、私の話をちゃんと聞いてくれた。それに今も私が不安になってないか聞いてきたしな。」

パミラは笑顔を浮かべて一切迷うことなく話していく。

くっ……、何できちんと理解しちまってんだよ……。めっちゃ恥ずかしいわ……。

俺は顔が火照っていくのを自覚しつつ、何とか話を逸らそうと考える。

「と、とりあえず召喚しちまった責任があるし、しばらくは俺のウチで面倒みるよ。」

「うむ。不束者だがよろしく頼む。」

パミラはそう言って床に座ったまま頭を下げた。

うん、結構礼儀正しいみたいだし、悪い奴じゃなさそうだから問題ないだろ。

「とりあえず腹が減ったのでご飯が食べたいぞ。」

「図々しいなオイ!!」

……やっぱ不安だ。

ていうかちよつと待て。さっきから忘れてたことがあった。

「そっちの鎧を着た子はどちらさんだ？ お前の知り合いか？」

「ああ、一応な。」

「……そのわりにはなんか嫌そうな顔してんな……。」

パミラはどうみても気が進まないといった感じだが、一応説明をしてくれるようだ。

パミラは少女を指差すと紹介を始めた。

「彼女は私の世界で<勇者>と呼ばれていた。魔族の長である私を殺すために送られてきたのだ。」

「・・・聞かなきゃ良かった。」

あつはつは。なんで厄介ごとは一気にじゃなくてじわじわとやっつくのかな〜？

あれ？ 景色が歪んでる？ なんてだろ？ あはは、頬があったかいな〜。

平穩が、俺の平穩が壊れていく〜・・・。

「早く飯が食べたいぞ。」

「まだ言うの!？」

第四話：とりあえず話してみよう。(後書き)

騒：どういうことだ!! 俺がほとんど出ていないぞ!!

作：すまん、予想ではもう少し書くつもりだったんだが、これ以上は展開を操作しきれなくなってしまっんでここで止めたんだ。次は出すって。

騒：本当だろうか!?

作：ホントだって。ほらとっとと今回の解説頼むぜ。

騒：わ、分かった。

作：(・・・何とか誤魔化せたか・・・)

魔術と魔法の違い・その2。

魔法はいわば道具のようなもので、何度も使うことにより練度が高くなると少ない魔力消費で大きな力を出したり出来る。但し魔法そのものが変化したりはせず、あくまで低燃費になったり威力がでかくなったりするだけだ。

それに対して魔術は技術に近い。自然の力を利用したり、効果の固定された呪文を使っているので威力や燃費が変わることは無いが、呪文を昇華させて新しい呪文へと変えたり、既存の魔術の効果を変化させたりして使用することが出来る。但し昇華された呪文が昇華する前の呪文より強力とは限らない。

騒：・・・とまあこんな感じだ。

作：今回もごくりーさん。それじゃあ次回もよろしくお願いします!

騒：よろしく。

第五話・やっぱり友好を深めるには飯だ。(前書き)

ダメだ……。今度は創作意欲が……。
オラに元気を……。。

第五話：やっぱり友好を深めるには飯だ。

「よつと……。」

家の台所。俺はフライパンで焼いていた出し巻き卵がいい感じに焼けてきたのを見計らい、片手に持った皿に出し巻き卵を投げ入れる。

「お〜。」

横で見っていたパミラが感嘆の声を上げつつ拍手をする。

今俺はパミラの飯を作ってる。パミラがもう1人の召喚されたやつが自分の命を狙ってる勇者だと言ってるから30分ほど経っている。もはや事態が一向に良い方向に向かわないため俺は一旦思考を放棄することにした。勇者の方は目覚める様子が無かったので俺の部屋で寝かせておいた。

……だつてさあ、次から次へと厄介ごとが増えてくんだぜ？俺もう疲れたよ……。

というわけで、俺は息抜きがてらにパメラの飯を作っているのだ。

因みにメニユーは焼き魚に味噌汁、今日の朝飯の残りのきんぴらゴボウ。今出来た出し巻き卵だ。

自分の分とパミラの分の味噌汁とご飯をテーブルの器に入れると、椅子に座る。

「いただきます。」

「うむ。いただきます。」

食前の挨拶をするとパミラは物凄い勢いで飯を平らげていく。いやもう使ってるスプーンとかフォークが見えねえよ……。

「おかわり!!!」

「早!? しかも味噌汁とご飯同時にかよ!?」

それ以外は皆半分ぐらいしか減ってないのに! ああもう分かったからお碗を顔に当ててくんな鬱陶しい!!

結局パミラは炊飯器に入っていた8人前ぐらいの量の米と、4人前分の味噌汁を完食してしまった。すげえ食いつぶりだった……。

「ふう。美味しかったぞマコト。それに珍しい料理も食べれたしな。」

「……どうも。」

俺は食器を片付けつつ返す。どうやらパミラのいる世界で日本食や多くの調味料が無いようで、料理も大半が外見を重視したものばかりらしい。

お陰でパミラが調味料で遊ぼうとしたから大変だった。まあ拳骨で黙らしたけどな。

パミラは居間でテレビを見ているようだ。

「むお!? 何故箱の中で人が川に落とされているのだ!? まさか、これは処刑なのか!?!」

結構驚いてんな……。つーかどんな番組を見てるんだ? 後それは多分処刑じゃなくて体を張ってお金を稼いでる方々だから、笑ってあげなよ。

「おお! 川からワニが追いかけてきて必死に逃げてる!! 八八八八八!!」

……凄い楽しそうに笑ってる。あの子Sかな? ていうか川にワ

二なんか放すなよ……。

俺はワニに追いかけてられている芸人の冥福を祈りつつ片づけを終える。

すると横から水色の触手が現れ、俺の肩を叩いた。すぐに横を見ると、水色のグミのようなものが「お帰り」と書かれたメモ帳を掲げていた。

俺は特に驚くことなく、手を振りながら挨拶をする。

「ただいまゲルくん。」

彼は兄貴が最初の召喚で呼び出したスライム(?)で、今はウチのペット兼お手伝いさんみたいな感じになってる。体を自由自在に変えられるので大抵のことは出来るし、意外と器用で気配り上手なので非常に助かってます。あと兄貴をしばくときに一番の働きをしてくれるし。

ゲルくんは居間の方を見ると、メモ帳の新しいページを開いて何かを書いていく。あ、どこに目があるかなんて聞くなよ？俺も雰囲気察してるんだからな。

ゲルくんは「彼女は？」と書いて俺に見せる。まあ当然の質問だな。俺は事情を説明する。

「え〜と、実は……。」

一通り説明を終えると、ゲルくんはさらに「……お疲れ様です」と書いた。

「……ゲルくんだけだよそう言ってくれるのは。」

ゲルくんの優しさが心に染みるよ……。でもスライム(?)にしか慰めてもらえないっ俺って……。

自分の境遇がかなり酷いことを嘆きつつ、何とか立ち直る。
すると、居間でテレビを見ていたパミラがこちらにやってきた。

「おいマコト！ 今ワニに追いかけられていた奴がついに……」

パミラはゲルくんを見ると途端に話を止めた。待て、「ついに……」の先は何だ。どうなったんだよオイ。

しかしパミラに俺の心の声が届く筈が無く、じつとゲルくんを見つめたまま動かない。ゲルくんは「えつと、初めまして……」とメモに書いていた。おお、こんなときでも礼儀正しいな。

……ん？ パミラの様子がおかしいな。何で体を震わせてんだ？
すると、パミラは興奮した様子で俺に尋ねてきた。

「な、なあ……。触ってもいいか……？」

あ、なるほど。確かにこのプルプルボディは触りたくなるよな。俺は触ったことあるけど、癒されるんだよな。

ゲルくんを確認をとると、「いいですよ」との言葉を返してくれた。パミラはゲルくんの体をつんつんと触る。つづく度に柔らかかな弾力を返してくるプルプルボディに、パミラは段々メロメロになっていった。

「おお……。何て柔らかさだ……」

「はいはいそこまでな。ゲルくん困ってっから。」

俺はゲルくんが「た、助けてください」と書かれたメモを見せてきたので、無我夢中で触り続けるパミラをゲルくんから離す。

「マ、マコト。頼むからもう少しだけ……」

「ダメだ。ゲルくんは触られるの苦手なんだから、コレくらいにしてやれ。」

「むう~~~~。。」

パミラは不服そうにしながらも何とか納得してくれ、ゲルくんから離れた。

ゲルくんも「たまになら・・・。」とフオーローしてくれた。それを見たパミラはとても嬉しそうな表情をしていた。・・・ま、たまには触らしてやってもいいか・・・。

何となく和やかなムードになったとき、不意に足音が聞こえた。どうやら2階から誰かが降りてきたようだ。

俺が誰が降りてきたかを確認するため廊下に出ると・・・。

「ふあ~~~~。。。。。む？ 真帰ってたのか。丁度いい。飯を頼む。」

・・・我が家のバカ兄貴が平然と起きてきていた。いやもうあんだけ他人に厄介事を回してくれたくせに、自分は悠々と寝てて、今になって飯をだと？ ダメだ。怒りが抑えきれねえ・・・。

「ん？アレ？何で拳を握ってるんだ？ しかもかなり怒ってらっしゃる！？ ちよっ待ってくれ俺が何を・・・、分かった！！ まず話を聞きたいだからその手に持った灰皿を置いて・・・ギャー——————！！！！！！！！！！」

兄貴が喋りを変えながら命乞いをしてくるが、そんなの知ったことか。

・・・さあ、私刑を執行しようか・・・。

「只今残酷な映像が流れているのでしばらくお待ち下さい」

・・・その後の記憶は何故か飛んでおり、気がつくと床に全身血まみれで何故か顔面がグシャグシャになった兄貴が転がっていた。

「ハア・・・ハア・・・はっ！ 俺は一体何を・・・。」

ちよつと待て、兄貴が起きてきて目の前に来たところまでは覚えてんだ。そっからのことが全く記憶に無いぞ。しかも俺真っ赤な灰皿なんか持つてるし。こんなの家にあつたか？

荒くなつた息を整えていると、慣れた感じでゲルくんが俺の顔に付いた血を拭き取ってくれた。何か決まって兄貴への怒りが頂点に達すると記憶が少し飛ぶんだよね。しかも大抵気が付くと兄貴が血まみれになってるし・・・、何でだろうな？

「お、終わったのか・・・？」

居間からやけに怯えた様子のパミラが顔を出した。しかも俺に対してのようだ。こっそりへこむが、何とかそれを顔に出さないように

する。

「あゝ．．．俺もいまいち覚えてないんだが、一応終わったみたいだぞ？」

「お、覚えてない？ あの惨劇を？」

「うん。」

「．．．バカな．．．あんなに笑ってたのに．．．。何度も殴りつけていたのに．．．。」

パミラは俺が何をしたか覚えてないことを聞くと、ぶつぶつと呟きだした。声が小さいので何を言っているのか聞き取れないが、随分と信じられないといった様子だ。

「．．．一体俺、何をしたんだ？」

「!？ き、きき気にするな！ いや頼むから気にしないでくれ！」

「? 分かった．．．。」

やけに懇願されたので、俺は渋々そのことについて考えるのを止めることにした。まあいいか別に。

とりあえず俺は床で血だまりを作っている兄貴を見た。ちなみに今ゲルくんが兄貴の手足に自分の体の一部をくっ付けて手錠を掛けていた。

アレやけに固くて中々開錠できないんだよな。ゲルくんには何故か魔術が効かないから、あの手錠にも魔術効かないし、結局本人に解除してもらうしかないんだよな。

．．．ま、大抵兄貴にしか使われないけどな。

「おい、兄貴起きろ。」

「ぐ、ううう．．．。誰か．．．新しい顔をくれ．．．。」

「・・・どうやら死に掛けて頭が混乱してるようだ。しょうがない、我が家の仕事人に何とかしてもらおうか・・・。」

「ゲルくん、こいつの頭を起こしてやってくれ。」

ゲルくんは「了解」と書く、体を蛇のように変えて兄貴の体に巻きついた。ゲルくん得意の「デビルスネーク」だ。

「ぐお!? 待てゲル私はしっかりと起きたからそれだけは止め・・・
・・・うおおおおお!!?」

ゲルくんは兄貴の全身に絡みつき、ぎゅうぎゅう締め付けている。俺も一度だけやられたことあるけど、いつもはめっちゃ柔らかい筈なのに締め付けが尋常じゃないんだよ。しかも全身に巻きつかれてるから抵抗も出来ないし。

俺はゲルくんがいい感じに弱らせたのを見計らい、締め付けを緩めてもらって話が出るようにした。

「おつす兄貴。ちょっと聞きたいことがあんだけど。」
「な、何だ・・・?」

少し苦しそうにしながらもちゃんと答えてくる。

「今日あれほどやるなっつっつといた召喚・・・、やったよな?」
「い、いや別に・・・すいませんやりました。」

青い顔でシラを切ろうとしたバカ兄貴をさっきの灰皿で脅迫すると、あっさり白状した。

俺はため息をつく、話を進めていく。

「……なんでやったんだ？」

「実は……、部屋で漫画を読んだら、魔王と勇者が戦っているシーンで……。」

〈回想〉

「うむ。やっぱり勇者と魔王は可愛い女の子じゃないとな。」

俺は読んでいた漫画を置き、ベットに寝転がったままある考えを思いつく。

「……魔王と勇者を使い魔に出来ないかな。」

このとき、真から召喚術は禁じられているのを思い出したが、

「まああいつが帰ってくる前に終わらせれば何とかかなるか。」

と適当に考えていた。

俺はすぐさま準備を整えると、召喚を始めた。

「んで、途中で暴走して気絶。現在に至ると……。」

「そうだ。……待て、どうしてそのことを知ってるんだ？」

「マ、マコト……。」

「ごめん。兄貴の我侬でこんなことになっちまって……。本当にすまない。」

俺は彼女に謝り続ける。何度謝ったって意味は無いと思う。俺は彼女達を元の世界に戻す方法を知らないからな。すると、パミラは頭を下げたままの俺の肩に手を置いた。

「……顔を上げてくれ。」

俺は言われた通りに顔を上げる。視界には、優しい微笑を浮かべたパミラは飛び込んできた。

「……私は君が悪いとは思ってないよ。君は突然現れた私を嫌な顔一つせずに世話を焼いてくれたんだ。それに、たまにはこんなことがあった方が楽しいからな。」

「……パミラ……。」

「それに、私は君が気に入ったからな。これくらいは許すぞ。」

そう言っただけでパミラは笑った。自分の意思とは関係なしに、異世界に飛ばされたのに、心の底から楽しそうに笑っていた。その笑顔を見て、俺もいつの間にか笑っていた。

「……何だか、結構やってけそうだな。最初はかなり大変なことになりそうだと思うんだけど、こいつとなら……。な。」

「ところで、ご飯はまだか？」

「まだ食うの!？」

……。我が家の食費は大変なことになりそうだ……。

第六話・勇者は布団が気に入った（前書き）

何か今回は笑いが無くてほのぼのとしています。

第六話：勇者は布団が気に入った

「う……ううん……。」

……アレ？　ここは一体……。

私は見知らぬベットに寝ていた。体を起こし、自分の体調を確認する。どうやら大きな怪我はしていないようだ。しかし、何故寝ていたのだろうか。

私は確か魔王と戦っていて……、そのとき謎の光に包まれて……
・それから言いたい何が……。

とりあえず、周囲を見てみる。周りには見たことも無いようなものが置かれていて、しかも中々綺麗に片付けられていた。

どうやらどこかの家の一室のようだ。だが、何故ここにいるのかは全く分からなかった。ともかく警戒しておいた方がよさそうだと思う、腰に手を当てて、愛用の剣が無いことに気づく。

「……え？」

そのとき、私は自分が鎧を着ていないことに気づいた。慌てて探すと、窓際の壁に鎧と剣が置かれていた。武器があることを知り、安堵のため息をつく。

そこで疑問が湧いてきた。私はどうやら誰かに保護されたようだが、何故その人は武器を取り上げなかったのだろうか。それに、何故自分を保護したのだろうか。

次々と出てくる疑問。しかし、この部屋には私1人しかいないため疑問に答えてくれるものはいなかった。

ふと、私は今まで自分が使っていた布団に触れる。今まで泊まった宿のどの布団より、さわり心地がよかった。思わずもう一度横になって布団の感触を楽しむ。

「・・・」

何だかこの布団からは不思議な匂いがした。安心するというか、こう・・・心が温かくなるという感じの匂いだ。

そのとき、私は天井に何かがいることに気づいた。慌てて布団から出て構えると、天井を確認する。

しかし、天井には何もいなかった。・・・思い過ごし？

そう思い、肩の力を抜いた時、部屋のドアが叩かれた。

「お〜い、入っていいか？」

外からは男性らしき人物の声が聞こえてきた。私は咄嗟に返事を返してしまった。

「い、いいよ・・・」

「んじゃ遠慮なく〜」

そう言うと声の主は部屋に入ってきた。

部屋に入ってきたのは、少し長めの黒髪を後ろで束ねている私と同じくらいの年齢らしき少年だった。彼は片手に持っているトレイに見たことも無い器を乗せていた。器からはとても美味しそうな香りがしていて、その匂いを嗅いだ私は不覚にもお腹から情けない音を鳴らしてしまった。

顔が火照るのを自覚していると、彼は苦笑しながら私に器とスプーンを渡してくれた。

「ほれ、食べな。味は保障するぜ。」

器にはお粥が入っていて、本当に美味しそうだった。けど、見ず知

らずの人間から差し出された食事をおいそれと食べていいのかと、私の冷静な部分が告げていた。

「でも、お腹空いたな……」

私が警戒してお粥を食べずにいると、彼は困ったような顔をした。

「……別に毒とかは入れてねえぞ？　・・・食わねえんなら、俺が・・・」

「……」

彼はお粥に手を伸ばしてきたので、私は無言で睨みつけた。

すると、あっさりと手を引っ込めた。……しまった。これでは絶対に食べなければいけない。

ちらりと見ると、彼はしてやったりという感じに笑っていた。

少し悔しく思いながらも、お粥を口に運んでみた。

「……熱っ。」

「ん？　君猫舌か？　・・・ちょっと待ってる。水持ってきてから。」

彼はそのまま部屋から出ようとしたが、突然こちらに振り向くと、私に話しかけてきた。

「俺は八神真つて名前だ。ま、よろしくな。」

笑顔で片手を振りながらそう告げると、彼は部屋から出て行きまた。彼が出て行った後、私はお粥に目を移した。

「……なんでだろう。彼が出て行くときに見せた笑顔が頭から離れない。」

先ほどとは違う理由で赤くなっていく自分の顔を不思議に思いながら、私はお粥を覚ましなから一口一口味わいながら食べていく。

「……美味しいな。」

「水持ってきたぞ・・・って、もう食べ終わってたのか。」

俺が台所に行つて水を入れたコップを持って戻ると、既に食べ終わつてベットに座っていた。おゝ米粒一つ残ってないな。偉い偉い。

「・・・美味しかった。」

彼女は俺が入ると、その一言を告げた。・・・やっぱり嬉しいな。こういうのって。

俺は嬉しさでついつい頬が緩むのを自覚していたが、気にせず水を渡した。

「俺の手作りなんだ。あんがとよ。ほれ、水。」

「ん・・・。」

彼女・・・パミラが勇者だと言っていた少女は、両手で水の入ったコップを受け取るとゆっくりと飲み始めた。

・・・両手で持ちながら飲むのって、なんか可愛らしいな・・・俺がそんなことを考えていると、コップを床に置かれているトレイ

に置いた勇者は、真剣な表情になって話を切り出してきた。

「えっと・・・八神・・・さん・・・。」

「ああ、呼び捨てでいいぞ。てか、好きなように呼んでくれて構わねえよ。」

「・・・じゃ、八神・・・。」

おお、苗字を呼び捨てされんのは久しぶりだな。

「ここは・・・どこ・・・？」

「・・・あゝ、異世界。」

・・・ああくそ、ナニソレって顔してるよ。ぜってえその顔すると思ってたんだよ。

取りあえず、俺は現状の説明をしていった。

・・・にわかには信じられない話だった。

私が住んでいた世界とは違う世界があつて、私はそこに召喚されたなんて・・・。

しかし、八神が嘘をつくような人には見えなかったし、こんな嘘について仕方が無いと思うので、ある程度は信じることにした。

・・・けど、一つだけ納得いかないことがある。

「ここに・・・魔王がいるって・・・本当？」
「ああ。あいつも俺の使い魔として召喚されたんだ。」

私は内心の驚きを隠しきれなかった。魔王と一緒に飛ばされてきたのは、まあいいとしよう。そんなこともある。

けど、目の前にいるどうみても一般人の八神が魔族の中で最強の魔力を持つ魔王を、仮にも勇者である私と一緒に使役できているということが信じられなかった。

彼は自分はこちらの世界で<魔術>と呼ばれる力を操ることが出来ると言っているが、それでも驚きは隠せなかった。

でも、そんなことは後で考えよう。今は魔王を倒すことを優先させるべきだ。

「魔王は・・・？」

「ん〜多分下でのんびりしてるぞ・・・ってまさか・・・。」

八神は事前に魔王から私のことを聞いていたのだろう。ベットから下りた私が何を考えているか気づいたらしい。

「おま、ダメだぞ！　ウチん中で戦闘沙汰起こすなんて！！」

「私は・・・魔王を倒さないと・・・。」

「ヤメテ！　これ以上我が家を壊そうとしないで！！」

八神が必死で止めようとすけど無視する。だって・・・私の生きてる理由なんて・・・これくらいしかないから・・・。
剣を取りにいこうと歩き出したとき、足から力が抜けた。

「え・・・。」

突然のことで受身も取れずに倒れそうになったとき、横から手が伸

びてきた。

「っと、どうしたんだよ？ 突然倒れ込むなんて。」

八神が私を片手で支えていた。そして倒れないように私を自分の方に引き寄せると、心配そうに顔を覗き込んできた。

小柄な体型の私を見下ろす優しげな瞳を見て、何故か顔を背けてしまふ。

「？」

彼が不思議そうにしているのが手に取るように分かった。しかし、この赤くなっている顔を彼には見せたくないと思った。

やがて八神は諦めたようにため息をつく、私にお姫様抱っこした。

「え、ちょ……。」

「はいはい苦情は受け付けませんよ。」

八神はそのまま私をベットまで持っていくと、私をベットに下ろして布団を掛けてくれた。

「まだ体調は万全じゃないみたいだし、しばらく寝てる。いいな？」

何だか子供を寝かしつけるような言われ方だったが、私は素直に頷いた。私を心配して言うてくれているのだから、逆らったりするのは筋違いだ。

八神は私が頷くのを確認すると、満足そうにしていたが、突然何かを思い出したらしく、手を叩いていた。

「あ、そうだ！ 名前聞くのを忘れてたぜ。」

彼は私の名前を聞いてきた。まあ彼になら教えていいかな……。

「……リン。」

「え？」

「リンテール＝トワイン……。」

「んじゃ、これからよろしくなリン。」

そう言っただけ私の頭に手を置くと、部屋から出て行った。私はしばらく、置かれた手の余韻に浸っていた。

……彼の手が、とても暖かったから。

ふう……これからはきつくなりそうだな……。

俺は階段を下りながら考える。

パミラは……まあ大丈夫だろう。トラブルを腐るほど持つてきそうだが、本人はそれほど悪い奴じゃないしみたいだしな。

リンは……魔王との溝を何とかしねえとな。多分ホントはとてこいい子なんだろうし、そこさえどうにかできりゃな……。

考えごとをしながらリビングに戻ると、パミラがテレビを見ていた。
……昼ドラ見てる。

「む、むうう……。これほどとは……。」

何かを呟いてるけど・・・精神衛生上良くないよなコレ・・・。
俺はテレビに近づくとチャンネルを変えた。

「あ！ マコト何で変えるんだ！！ 今いいとこなのに！！」
「こんなドロドロしたもの見てんじゃねえ！」

俺昼ドラ嫌いなんだよ。ねちっこくて・・・。
チャンネルを戻そうとするパミラと10分ほど死闘を繰り広げるが、最終的に俺が作ったクッキーを餌付けすることで落ち着いた。
他のチャンネルには面白いのが無いのか、ソファーに寝転がるパミラ。

ふと、俺は疑問に思っていたことを尋ねた。

「なあパミラ。」

「ん？何だマコト？」

「何でお前は勇者に狙われてたんだ？ 正直お前は悪いことはやってなさそうだし、イマイチ理由が思いつかんのだが・・・。」

パミラは俺の疑問に、つまらなそうに答えた。

「簡単だ。とある権力者にとって、私は邪魔者だった。だからその権力者は私を悪者にしたてて謀殺しようとしたんだ。」

「・・・成る程、そういうことか。」

どこに行ってもむかつく奴はいるもんだな。俺は見知らぬそいつを頭の中の「半殺しリスト」に追加した。ちなみに兄貴は名誉会員として常時入っているぞ。

すると、俺の顔に不機嫌さが表れていたのか、パミラは俺を見て嬉しそくに笑っていた。

「やはりマコトはいい奴だな。」

「・・・なんでだよ。」

「まだ初めて会ってから一日も経っていないのに、私のことで腹を立ててくれるからな。」

特に反論が出来ないので、俺はそっぽを向くことにした。・・・こんなこと言われたら誰だってこんな反応だろうよ。

「じゃあ、勇者についてはどう思ってるんだ？」

「・・・可哀想だと、思ってる。」

え？ 俺は意外な答えに驚いた。こいつのことだから恨んだりはしてないと思ってたが、こんな答えが返ってくるとは・・・。

「・・・なんでだ？」

「・・・あいつは私を倒すこと、それだけを目的に育てられたんだ。だから、もし私を倒せないとなると自分を保てなくなる、そんな奴なんだ・・・。」

悲しそうな目をしながら話すパミラに、俺は何だかキレ始めていた。

「ふざけんなよ・・・。そんなことがあつてたまるか。んなくならねえ育て方したヤツここに連れて来い。俺がツームストーンパイルドライバーで目覚ましてやる。」

って、これじゃこいつの思う壺じゃんか。あたゝ、下手こいたゝ。パミラを見ると、くすくすと笑っていた。とても無邪気な笑顔で。

「・・・／＼あゝもう俺はちょっと出てくるから！ 大人しくしてろよ！..!」

それを見た俺は顔が真っ赤になるのを何とか堪えつつ、何かここから出る口実を探し、俺は夕飯を買ってきてないことを思い出して、スーパーに行くことにした。

・・・逃げたわけじゃねえぞ！

第六話：勇者は布団が気に入った（後書き）

作：どもっス。今回は俺が魔術を使ってみようかと・・・。

真：待てえ！ 手前なにしようとしてんだ！！

騒：いいではないか！ 私は本編で出番が回ってこないんだぞ！！

真：いつの間に！？ てかアンタが原因か！！

作：ええい、邪魔するな！ <スロウス>！！

真：あつてめ何他人の足遅くしてんだ！！

作：今のうちだ！！急げ！！

騒：では、私の従順なる僕兼新キャラとなる生き物を呼ぶ儀式を始めよう・・・ん？ おかしいな・・・。

作：ど、どうした！？ 早くしないと真が・・・！！

騒：いや、まだ起動させていない筈なのに、既に召還陣が発動していてな・・・。

作・真：『え・・・？』

騒：いや、どうやら失敗のようだ。ハッハッハ。

作：なんだと~~~~！！！！？？？

真：だから止めとけって言っただろ！！ うお！？ 何か光って・・・

・・・！？

皆：『ギヤああああああ！！！！！！』

?????：ふっふっふ・・・。次回は私が出るわよ！！

第七話：お説教の時間だぜ。（前書き）

夏休みです。しかし、何故か今週は毎日学校に行ってます。
・・・就活めんどくせーよ！。

第七話：お説教の時間だぜ。

今、俺はリビングにでテーブルを囲むように置かれてるソファに座ってる。正確に言うなら、とっ捕まってる。横にいるやつに。

「~~~~~」

俺の横で犬のような唸り声を上げてんのは、高校のクラスメイトにして俺が魔術が使えることを知っている数少ない友人の1人である児玉繰子だ。

やけに長い綺麗な黒髪は、腰まで伸びている。普段は地面へと伸びているが、今はちよつと浮いてる。・・・どうやら彼女は感情が高ぶると髪が浮くらしい。

彼女は学校で生徒会副会長をしていて、今日はその関係で学校に残って様々な仕事をしていた

らしい。だから着ている服も制服のままだ。

知り合ったのは1年前。彼女と俺がちよつとした事件に関わり、そのときからの付き合いだ。あ、やましい意味は無いからな。

そんで、知り合ってから以来妙に俺と少しでも一緒に居ようとするので今ではちよくちよく飯を食わせたりする。

それで、今日も生徒会の仕事が終わって俺んちに来て、パミラとリンを見つけてからこうなったんだ。

「~~~~~」

繰子は俺の右腕にしがみつきながら、2人を威嚇するように唸っている。あの、柔らかいものが当たってるんですけど・・・。

「~~~~~」

右のソファに座ってるパミラは、なんか羨ましそうな顔をしてる。
・・・なんで？

「・・・・・・・・。」

左のソファに座ってるリンは、顔をむすくすくとさせて繰子を睨んでる。いかにも怒ってますって顔だ。何に腹を立ててるかは分からんが。それより誰かカメラもってこい。リンのこの顔は凄いで。俺でも可愛いとか思ったから。

とまあ、なんか三つ巴のにらみ合いになってるわけだ。え？俺は何もしないのかって？いやね、今さっき喋ろうとしたらさ、

「まーくんは黙ってた！」

「・・・・・・・・黙ってた。」

「すまないが黙っていてくれ。」

とか言われたんだよ？ 3人同時だよ？

口出しできません。心が折れそうなんです。その3人は一向に話す気配がねえし、どないせえちゅうねん！？

つたく、何でこんなことに・・・・・・・・。俺は先ほどのことを思い出してみた・・・・・・・・。

〈回想〉

20分前。

スパーからの買出しから帰ってきた俺は、両手に持っている戦利品のお陰で随分とご機嫌だった。なにせ、俺が懇意にしているスパーは迷宮のように入り組んでいて、初めて入ったやつは100%

迷子になるからな。んで、俺はその迷宮の奥にある特売品、1キロ500円の牛のバラ肉・定価の半分以下の野菜などをゲットしてきたのだ。思わず頬が緩んでしまう。

「ただいま。」

「ん、お帰り。」

俺が家に入ると、パミラが返事をしてくれた。どうやらリビングでくつろいでるらしい。靴を脱いだところでゲルくんが来てくれ、袋を片方持ってくれた。本当は両方持とうとしたんだけど、流石にそれは悪いので片方だけにしてもらった。

「あんがとゲルくん。」

俺が礼を言うと、ゲルくんは「イインダヨー！」とメモに書いた。・・・この子もたまにボケるんですよ。

買って来た食材を台所の冷蔵庫まで持っていく途中、リビングのソファで寝転がりながらテレビを見ているパミラが目に入った。・・・他人の家でよくもまあそんなに寛げるなあい・・・その後、買って来たものを全て片付けると、俺は2階のリンの様子を見にいった。何やってるか気になったんでな。

部屋の前まで行くと、きちんとソックスをする。俺の部屋なんだけだな。

「おす、入っていいか？」

「・・・いいよ。」

少しの間があったが、了承はもらったので、俺はドアを開けて部屋に入る。

リンは中で愛用品らしき2本の両刃剣で素振りをしていた。結構な

回数をこなしたのか、額には汗が浮かんでいた。・・・大丈夫なのか？ さっきは倒れ掛かったからな・・・ちよつち心配。

「もう体は大丈夫なのか？」

「うん・・・。何とか・・・。」

むう・・・、つーことはまだ少し悪いってことか・・・。それじゃ安静にしてもらわねーとな。

「それくらいにしとけ。無理して倒れたら意味ねえだろ。」

「・・・分かった。」

俺が言うと、リンは渋々ながらも剣を鞘に納めて自分の腰に差す。・・・おや？ 何か不自然なところがあつたような・・・。

「ってオイ待て！ 剣持っていつてどうする！」

「？だつて・・・下に魔王がいる・・・。」

ああくそ、そついや彼女は魔王を倒すことが目的だつたつけ・・・。だがしかし！！我が家で争いごとは禁止だ！ 何故なら物を壊されるのは御免だから。

え？ 兄貴？ あれはお仕置きですよ。

「いいから置いてけ。俺の目が光ってる内はあいつと鬨り合つのは禁止だ。」

「でも・・・。」

これだけ言つてもまだリンは剣を持っていくこととする。

一瞬怒鳴ろつかと思つたが、すぐに思い直す。女の子に怒鳴っちゃ男としてダメだろ。

ため息を少しだけ吐くと、俺は彼女の両肩を掴み、彼女の暗い目を真っ直ぐに目を見据える。

「たまには肩の力を抜いて、普通に生きてみるよ。リン。」

「普通……に……?」

「そ。勇者とか魔王とか、そんなんは忘れて、毎日を楽しむ。剣を置いて、ゆっくりしてみる。そんだけだ。」

「わ、私は……。」

リンは反論しようとしてくる……何を言つか知らねえけど、そんな泣きそうな顔で何を言うつもりだよ。

「言つとくけど、自分を否定するような言葉は禁止な。資格が無いとか、価値が無いとか。」

「!?!」

随分と驚いた顔をしている。何となく読めたんだよ。

俺は片手を彼女の肩から離すと、頭をがしがしと掻いた。

「あのな……もしお前に価値や資格が無いってんなら、ここにいらねえんだよ。」

俺は呆れた口調で話していく。

「誰だって生きてていいって資格があるからい生きていらねえんだよ。誰だって生きてるだけの価値があつから生きてんだよ。なのに、今この場で生きてるお前に価値が無いわけねえだろおが。」

何か言葉が荒くなってきたな……。でもしょうがないんだって。自分に価値が無いなんて思ってるアンポンタンにはこれくらいきつ

く言ってやんねーとダメだからな。

「生きてることに胸を張れ。自分に誇りを持って。お前はその資格があんだからよ。」

最後に笑いかけてやって、俺のお説教はおしまい。やれやれ、呼びに来ただけなのに、結構時間食っちゃったな。

リンはしばらく固まっていた。どうやら俺の言ったことを理解すんに時間掛かっているみたいだな。その様子を眺めてたら、いきなり抱きつかれた。ってアレ？

「お、おいリン……。」

いきなりなにを、って続けようとしたんだけど、出来なかった。だって、泣いてるからな。俺の胸に顔沈めて。

「ふえ……えぐっ……うううう……。」

必死に声を出さないようにしてるけど、耐え切れずに漏れ出してる。んで、両手は俺の服をぎゅっと握り締めてる。服が伸びそうだけど……ま、許してやるか。

俺はなんとなく彼女の頭を撫でた。深い意味はねえぞ？ただ撫でてみてーなーって思っただけ。

俺が力を極力押抑えて撫でると、最初は少し体をビクッ！って震わせたけど、すぐにされるがままになってくれた。

リンの頭は撫で心地が良くて、なんだかほっとした。

彼女も俺が撫でてるうちに段々とリンも泣き止んできた。

「落ち着いたか？」

「……うん。」

俺が尋ねると、彼女は俺の胸に顔を沈めたまま頷いた。これなら大丈夫かな。

俺は彼女を体からゆっくりと離れた。その時見たリンの目は先ほどとは違い、ちよつとだけ光があつた。よし、オツケーだ。

「んじゃ、とつとと1階に行こうぜ。」

「分かった。」

リンは剣を鞘に入れたまま腰から取ると、部屋の壁に立て掛けておいた。

「よしよし。偉い偉い。」

俺はリンの頭を撫でてやる。リンは少し顔が赤くなつてたけど、嬉しそうに撫でられてくれた。

リンの撫で心地を存分に堪能した俺は、部屋を出て1階に向かった。リビングに向かうと、ゲルくんを捕まえようとしてるパミラが目に入った。ゲルくんは俺を見つけると、すぐに俺に向けて「助けて下さいー!!」と書いてきた。

しょうがない、助けてやるか……。

「何やってんだパミラ。ゲルくん怯えてんじゃねーか。」

「む、遅かつたな。どうしたのだ？」

「ちよつとだけ説教してたんだよ。ま、その甲斐はあつたけどな。」

俺が注意すると、パミラはゲルくんから注意を逸らし、俺の背中に隠れてるリンを見つける。あ、ゲルくんが台所に逃げてつた。

「こつやっつきちんと話すのは初めてだな。」

「……り、リントール＝トワインです……。」

おお、きちんと挨拶したな。撫でてやりてーけど、人前だとちょっとはずいんだよな。

パミラは彼女からの自己紹介に少々驚いたようだけど、すぐに笑顔を浮かべて今度は自分が挨拶をした。

「私はパミラだ。本名はかなり長いから、パミラでいい。これからよろしくな。」

パミラはそう言って手を伸ばした。リンは躊躇いがちに手を伸ばすと、パミラと握手をした。良かった。これならもう心配しなくてもいいか。後は時間がどうにかする。

それよりも、ちよつと聞き捨てなら無いことがあるな〜？

「何で俺のときはあの長つたらしい本名言っただよ。」

「それはあれだ、掴みというやつだ。」

「どんな理由だよ！　そして掴めてねえよ！！！」

「気にするな。生えるぞ。」

「禿げるんじゃない？　しかも何が生えるの！？」

「キノコ。紫色だ。」

……自分に紫色のキノコが生えるのを想像する……
……最悪だあ！！！！

「何でキノコが生えるんだよ俺！　そして何でそんな色なんだよもつといい色にしてくれよてかそもそも生えるかあ！！！！」

ああくそ、息継ぎできなかつたんでキツイ！てか長い！！

「おお、あれだけの突っ込みを息継ぎ無しで言うとは……。」
「凄い……。」

「オネガイヤメテそんな羨望の眼差しで見ないでくれ……。つー
かりんもさり気に混ざるな!!」

「楽しそうだから……つい……。」

「ふざけんな！ そんなことが言い訳になるかー!!」

ちよっともう誰か助けて!? いい加減疲れたよ俺!!

俺が脳内で救難信号を出していると、突然インターホンが鳴った。

ピンポン。

誰!? いや誰でもいい!! ともかくここから離脱せねば……!!

「2人とも！俺は客が来たから出る!! ここで大人しくしてなさ
い!!」

「え〜?」

「……分かった。」

不満そうなパミラと、素直に返事をしたリン。でもなんでだろ？

リンの方が凄い不安なだけ……。何やるか予想出来ないし……。

一抹の不安を残しつつ、俺が玄関に行つてドアを開くと……。

「こんにちまーくん!!」

「お、おっす児玉。」

そこには俺のクラスメイトの児玉がいた。どうやら生徒会の帰りらしく、手提げ鞆を両手で持って立っていた。

「まーくん、私のことは名前で呼んでって言ってるでしょ？」

児玉は腰に手を当てて、いかにも不満そうにしていた。無茶言うな。そんなこと言ってみろ、またファンクラブの連中と鬭り合う羽目になるだろーが。

実は児玉には極秘のファンクラブが存在する。まあ遠くから見ても分かるほどの美貌に、頭も運動も完璧。その上誰にでも平等に接するっつー完璧超人だ。分からんでもない。しかし、何故か俺は連中に敵視されており、校内でちよくちよく襲撃されるのだ。無論返り討ちだがな。

「別にいいだろ。んで、今日も食いにきたのか？ 悪いけど今日は客が来てっから無理だ。」

「ええ！？ 客って誰！？ まさか・・・私を差し置いて別の女と・・・！！！」

「待て！ 何でそんな昼ドラ風の雰囲気になってる！！ とにかく落ち着け！！！」

「家の中から・・・嗅いだことの無い女の匂いがする・・・！！」

な！？ あなたはどんな嗅覚お持ちなんですか！？

だが、これはマズそうだ。なんとか2人を見られる前にお帰りしていただくしか・・・。俺は家の中に入ろうとする児玉を何とか押さえつつ、事態の收拾方法を考える。

しかし、神様はこういうときに余計なことをするように命令するらしい。

「マコト？ どうかしたのか？」

「どうしたの・・・？」

今来ちゃダメー！！！！！！！！！！

第七話：お説教の時間だぜ。（後書き）

さっき家の食器洗ってたら、手が水死体みたいな色になっててビビりました。昔兄に「脈ねーぞ！」って言われてるので、ちょっと気にしてたり。

・・・俺は死人なのか？

第八話…これが臨死体験か…。(前書き)

うああ~~~~~。暑くてなにも出来ぬ~~~~。

第八話：これが臨死体験か……。

さて、前回から痛いほどの沈黙が支配している我が家のリビング。横には怒りのオーラを出している児玉。前方の右側には羨ましそうにしているパミラ。前方の左側にはむっすくと不機嫌そうにしているリン。

あ、そういやゲルくんはどうしたんだろ。何気無く最後に見かけた台所の方を見ようとして……。

「どこ見てるの？」

「ベツニナニモミテマセンヨ？」

……物凄い力で顔を強引に児玉の方へと向かされました。わっ、凄
い笑顔だよ。恐怖で思わず片言になっちゃったよ。ほら見てくれよ、
足がガックガク震えてるだろ？

俺の心境が蛇に睨まれた蛙の状態になると、児玉が蛙を睨んで
る蛇の雰囲気を全く緩めずに、俺質問してきた。

「ねえまーくん。」

「何でしょうか児玉お嬢様。」

「殴っていいかな？ 44回ぐらい。」

「すいません今にも俺の頭を押しつぶそうとするあなたのその腕で
やられたら俺は確実に息絶えると思いますからオネガイタスケテコ
ロサナイデ。」

すまん。また恐怖で片言になってしまったようだ。ぶっちやけ片言
になるってのは、余りの恐怖に声に感情が込められない状態になっ
てると出てくるんだ。

今俺はテロリストだって裸足で逃げ出すような殺気を放っている児

「!!」

児玉が俺を抱えたまま2人へ文句を言う。てか児玉さん。俺の顔を両手で抱え込むのは止めてくれ。あなたの胸が顔面にダイレクトに当たってるんだ。息も出来ん。

「貴様がマコトが嫌がることをするからだ。」

「八神から離れて……。」

2人は児玉の文句なんて全く聞き入れる様子は無く、寧ろ児玉が俺を抱きしめてしまっているのですさらに怒りが増したらしい。2人の背後に炎のようなオーラが現れていて、パミラは右手に先程よりでかい魔力球を。リンは魔力を集めて剣を作り出していた。どうやら本気で児玉を潰す気らしい。てか絶対殺る気だ。

2人の仲がよくなって喜んだらいいのか、こんなときに団結してることに悲しんだらいいのか……。

あと、児玉の胸に呼吸を塞がれている俺はそろそろ気が遠くなってきた。もう手があがない。力が入らないです。

「やる気ですか！ 上等です！！ 返り討ちにしてあげます！！」

2人が殺る気マンマンなのを確認すると、児玉は戦闘態勢に入るため片手を懐に入れて一枚の札を取り出す。

児玉は札を頭上に掲げると、声を張り上げて言葉を紡いでいく。

「我は呼ばん！！ 日ノ本の国にて太陽を司る、神代の女神！！」

<天照>！！！！」

彼女の言葉が言い終わると、彼女が持っていた札から神々しい光が溢れ出し、その光は段々と人の形をかたどっていく。

「くっくっくっ……!!」
「うっくっくっ……!!」

余りの眩しさにパミラとリンは目を瞑っているが、光の発生源の一番近くに居る児玉はまるで光が存在しないかのように平然と目を開けていた。

やがて、光が消えてからパミラとリンが目を開けると、児玉の後ろに仰々しい巫女服に身を包んだ女性が出現していた。

「な……………」
「……………!!」

2人は児玉が呼び出した日本神話において太陽を司るとされている女神、天照大神あまてらすおおみかみを見て絶句している。

無理も無いか。まさか一般人だと思っていた児玉が神降ろしを、しかもかなりの位の神を呼び出したんだ。そりゃ驚くだろう。

児玉は2人の驚いた様子を見て満足そうにしていた。

「ふふん、どう!? あんまり舐めてたら足元掬われるわよ?」
『児玉。油断は禁物です。どうやら彼女達はかなりの力の持ち主のようですから、下手をするとあなたが足元を掬われますよ?』
「わ、分かってるわよ。」

アマテラスにたしなめられ、児玉は気を取り直すとパミラ達に向き直る。

「まさか、これほどの力を持つていたとは……………」

パミラは素直に驚いていた。その様子を見て、児玉は実に自慢げに

己の力について語り始めた。

「私は霊的な存在にとり憑かれ易い<霊媒体質>なの。それも神を降ろすことができるほどに強力だね。」

「・・・手強い。」

リンがぼつりと呟く。それはそうだろうな。アマテラスは児玉が降ろすことの出来る上位神の中でも五指に入るほどの力を持つからな。しかし、そのアマテラスが認めるほどなんだから、あの2人も相当な実力者なんだろう。あらためて2人が「勇者」と「魔王」であることを認識する。

「そむ、そちらの準備も出来たようだし、そろそろ始めるか。」

「上等よ!!あなた達を倒して、まーくんを独り占めするんだから

!!!!」

「・・・八神は渡さない・・・。」

それぞれ準備が整ったので、いよいよおっ始めようとしてる・・・のはいいんだけど、いい加減俺の状態に気づいてくんないかな?・・・ダメだ、3人も目の前の敵に集中してて気づきそうにない。すまんアマテラス、教えてやってくれ。

『仕方ありませんね・・・・・・・児玉。』

「何よアマテラス。」

『真の様子がおかしいですよ。』

「・・・え?」

アマテラスに言われて、児玉はようやく俺の異変に気づいた。

四肢が完全に抜けていてぴくりとも動かず、先ほどから一言も言葉を発していない。え?今話してるだろうって? まあまあ気に

しないでくれ。

児玉は恐る恐る片手で抱え込んでいた俺の顔を見る。・・・目は白目になっており、口がだらしなく開かれていた。そして何より・・・息をしていなかった。

いやぁ、実はずっと児玉に呼吸を塞がれてて、いつの間にか呼吸が止まっちまったんだよ。

こうして話してる俺は何かって言うと、ほら、俺の口から魂が出てるだろ？コレだよコレ。

「いい息してない！！！」

「な、何い！！？？？」

「口から、口から白い物が・・・！！！」

俺が三途の川を渡りかけてることに気づいた3人が大慌てで喧嘩を止め、俺の介抱をしていく。あゝ慌てなくていいから児玉はそんな息を荒立てて人工呼吸をしようとするな。傍から見たら変態に見えるぞ。

パミラ、頼むから魔力球当てて起こそうとするな。そんなんで起きるか。

リン、何で服を脱がしていく。やけに目がぎらついてるぞ。あ、コラ児玉もリンに協力すんな。

3人が介抱？らしきことをしている間、アマテラスと同じく霊体になっっている俺を見てアマテラスは一言だけ告げた。

『・・・お疲れ様です。』

・・・ホントに疲れたよ・・・。

第九話：悪いことしたら罰は当然でしょ（前書き）

前回の更新から1ヶ月近く開けてしまいました。

・・・ホントすいません!!!

第九話：悪いことしたら罰は当然でしょ

ハア・・・全く、彼女達は何をやっているのでしょうか・・・。
現在ゲルさんが看病されている真の部屋を見つつ、私ことアマテラスはため息をつきます。

今、私を降霊した児玉やリンテールさんパミラさんは真の部屋の前で正座しています。両手足を縛られて、足にコンクリートの重しを乗せられて昔の拷問のようになっていますが、気にしないで下さい。あの後、台所に避難していたゲルさんが真の容態に気づき、児玉達が効果的なことが出来ないことを知ると一旦その場からいなくなり、真の兄である騒来を呼んできたのです。

流石に天才的な魔術師である騒来は、回復、蘇生、強化の複数の魔術を同時に操ると言う高度な技術を駆使し、瞬く間に弟の危機を救って見せました。

・・・終わったときに真に悪戯（マジックによる落書き）をしようとしてゲルさんにシメられていましたが。ああ、その壁に黒のマジックで「タスケテ」と書かれているのは気のせいですよ。あとで消しておきましょう。

「アマテラス……、もう許してよ……」
『却下します。』

児玉の悲痛な声が聞こえたようですが、無視です。たまにはお灸を据えてあげないとダメですからね。

「なあ……私がこれをやらされる理由はなんだ？」

「私も……。」

『あなた達が暴れたことも原因の一端なのですから、当然のことです。』

自覚があってもなくても、悪いことをしたからには罰を受けてもらいます。

「それとも……もつと酷い罰にした方が良かったですか？」

私にこりと笑いかけると、3人はビクッ！と震え、次に物凄い早さで首を横に振りました。おかしいですね、少し凄んだだけなのですが、そんなに怖かったのでしょうか。少しショックです。

と、その時真の部屋からゲルさんが出てきました。「終了です」と書かれた紙を持っていることから、どうやら真の容態は安定したようです。

ゲルさんの後ろからは未だに顔色が悪い真が少々頼りない足取りで出てきました。

「う~~~~…。何か体が浮いてる感覚が……。」

もう幽体離脱はしていませんよ。心の中でこっそり呟きます。

部屋から出てきた真は、拷問紛いの罰を受けている3人を見てびっくりしていました。

……若干体が引いたのは気のせいではないかと思えます。

「え〜と、コレは何？」

『罰です。』

「……物凄く太腿がきつそうだけど……。」

『気のせいです。』

「3人も涙目で『助けて』って訴えてくるんだけど……。」

『気のせいです。』

「……ハア。俺は怒ってないから、そろそろ許してあげなよ。」

『……仕方ありませんね。』

被害者である彼から言われたのでは離さないわけにはいきません。私は靈力で作った重しと両手足を拘束していた縄を解除して彼女達を解放します。

「うゝ痛かったよゝ．．．。」

「わ、私は足が痺れて．．．立てないぞ．．．。」

「．．．．。」

手を振って体をほぐしながら立ち上がった兎玉に、正座に慣れていなかったのか痺れて立ち上がろうとしないパミラさん。リンさんは何故か足を軽く浮かせた状態で固まっています。恐らく彼女も痺れたのでしょう。いい気味です。

「おゝいアマテラスゝ、笑みが凄いいことになってるぞゝ．．．。」

ハッ、私としたことが．．．つい心境を露わにしてしまったようです。猛省しなければ．．．。

さて、ようやく三途の川から帰還したんだが．．．。

『それでは、第一回【真殺害未遂事件】についての裁判を行います。』

「何やってんのアマテラスさん!？」

いつの間にか、裁判官の人が着ているような服に着替えていたアマテラスに突っ込みを入れておく。また面倒なことになってるよ！

「？ この罪人たちに死刑を与えるさいば……。」

「はいストーリーップ！ いいよ皆まで言わなくて！ 寧ろ聞きたくない！！ てかそもそも裁判は罪状を決める場であって死刑判決はその一つなだけだ！！ 何で死刑一直線なんだよ！！」

『私の気が済まな……げふんげふん。』

「今本音漏れたでしょ！！」

『気のせいです。』

「さつきからそればつか……ごめんもう何も言わないから背中に「10t」て書いてある重りに乗っけるのは止めてくれ……。」

俺は突如として現れた鉄塊の重さに潰されそうになる。お……重い……。

『しばらくしたら解除しますから、それまで頑張ってください。』

「ちょ、ヒド！？ もう床に足がめり込んでんだけど！」

『それでは、被疑者から何かありますか？』

「無視されたー！！」

段々と体が曲がっていく俺を無視して、アマテラスは裁判を始めちゃいました。ぐおお……。背骨から悲鳴が聞こえてくる……。。

第十話：くそーーーーー！！！！（ジャックパワー風に）（前書き）

前回の更新から……もう数える気にもなりません。がな。
しかも短いし……。

第十話：くそーーーーー！！！！（ジャックパワー風に。）

『それでは、私はこれで・・・。』

「・・・散々荒らしてた拳句逃げてくのな。この惨状をどうしろってんだよ。」

俺は本来く神界と呼ばれるところに住んでいるアマテラスがそこへ帰ろうとするのを、にこやかな笑顔と冷たい目で見つめている。

え？ 物凄い殺気が出る？ 仕方ないんだよ。

だつてさ、背後にあるわさび9割シャリ1割の寿司食わされて悶絶してる児玉とか、10分間耐久でくすぐられて痙攣してるパミラとか、18禁な本を読まされて頭がオーバーヒートしてるリンとか、こんな死屍累々の惨状を広げた張本人が後始末もせずには帰ろうとしてるんだよ？ そりゃ毒だつて吐きたくなるって。

因みに、後ろに転がってる3人はアマテラスによる帝国裁判・・・ぶっちゃけ罰ゲームを受けてこうなってる。しかも一回や二回じゃなかったりする。

まあ確かに俺はなるべくソフトにやってくれって言っただけだな？ こんなんソフトじゃないだろ。ハードだろ。

「頼むから後を考えてくれよ・・・。片付けやんのは俺なんだぜ？」

『さてと、スサノオやツクヨミも心配してるでしょうし、この辺で帰らせていただきます。』

「スルーすんなやコラ。おいこつち向け。」

古事記において、アマテラスとともにイザナミから生れ落ちた最後の神々の名を出してその場から素早く逃げようとするエセ裁判官を、その肩を力一杯掴むことで捕らえておく。 逃しはしねえぞコラ？

『離してください。私は鳥になるのです。』
「意味不明なこと言って煙に巻こうとすんな!!　そもそもお前神様じゃん!!!」

神様が鳥になってどうするよ。退化じゃん。

『いいではないですか。私だって空を飛びたいのです。』

「お前素で飛べるじゃん。」

『神気を使わずに飛びたいのです。』

「・・・俺がこの前、お前に何で浮遊しながら移動するか聞いたら、歩くのが面倒なので。」とか言ってただろ。」

『・・・・・・・・。。』

そのときのことを思い出したらしい。体が石化して窓から身を乗り出そうとする格好のまま動かなくなった。ようやく諦めたか・・・。

『・・・・・・・・隙あり。』

「あ!　てめ・・・・・・・・!!」

と思っただら演技だったらしい。俺が油断したところを狙って、アマテラスは窓から外へと逃げ出してしまふ。神様の癖に汚い手使うんじゃないねえ!!

アマテラスは庭に出て俺の手が届かない位置まで浮遊すると、悪戯っぽい笑みを浮かべてこちらを見てくる。

『今日は楽しかったです。また何かありましたら呼んでください。』

「100年ぐらいはせってー呼ばねえ。」

岩よりも固い決意を含めてアマテラスに告げるが、多分彼女が聞き入れることは無いんだろうな。児玉の交霊できる神格クラスの中で一番出番多いのこいつだし。児玉との付き合いが長いのもこいつだしな。

「大丈夫ですよ。繰子が呼んでくれますから。」

「・・・いつか封印してやる。」

人間とは生物的なエネルギーの質、俗に言う『魂』の位が遥かに高次元の存在である、アマテラスのような神格クラスは、生物のような『死』という概念が無い。そのため、人間が神格相手に戦うときは、相手を弱らせてから封じるしか勝つ術が無いのだ。

流石にアマテラス相手じゃ俺でもきついけど、できないわけじゃないしな。

「フフフ・・・。そう言うわりには、皆楽しそうにしてみましたか？」

「む・・・。」

アマテラスの言う通りだ。彼女達は罰ゲー・・・OK間違えた。言い直すから睨むのは止める。

罰を受けている間は、皆罰を食らってる奴を見てとても楽しそうに笑っていたのだ。それこそ、さっきまで一触即発の状態だったのにも関わらずだ。

児玉がわさびのあまりの辛さに叫び出して、本人以外の全員が大爆笑してたり。

パミラが10分間くすぐられて軽く失神してるのを見てドン引きしたり。

リンが18禁な本を見せられて驚きのあまり気絶してしまい、俺はもちろんパミラや児玉でさえも心配して近寄っていたりもしてたな。

そんなことをしていたら、いつしか皆知り合いみたいに笑いあっていた。

「……いやまあ、確かにそうだけど……。」

だからって、途中からジョロキア（ハバネロより辛い代物。ぶつちやけ死ねるレベルの辛さ。）を生で食わせたり、やったこともない歌舞伎の物まねをやらせたのはどうかと思うぞ。児玉恥ずかしさで気絶しちゃったじゃん。

「わだかまりを失くすために、仕方なくですよ。……これでもこの国の神なのですから。」

「嘘だ。俺はお前が時々黒い笑みを浮かべるのを見逃さなかったぞ！」

「……気のせいですよ。」

「ふざけんな！ 今の間は何だ！！」

「……【天岩戸あまのいわと】。」

「あ！ てめ、逃げんなコラあ！！」

アマテラスが急に、古事記に描かれる黄泉と現世を繋ぐ巨大な岩で塞がれた扉を出現させて逃げ出そうとする。俺は空中に開かれた光の扉から吹き出てくる猛烈な風により、身動き一つできずに腕を顔の前にかざし、風が当たるのを
少なくともするのが精一杯だ。

ああくそ！これがあるのをすっかり忘れてた！！

「それではこの辺で。ごきげんよう。」

「いや待てふざけんなー！！！！！！」

そのままアマテラスは光の扉の向こうへ……、神々が住む」

第十一話：誰かがハッピーだと誰かがアンハッピー。

「ん……う……ん……。」

「……私は……確かリビングで……。どうやら、私はたった今まで眠っていたらしい。いつの間に眠ってしまったのだろうか……。少し記憶を遡ってみる。」

「……ああ、この国の『ワサビ』という香辛料をスプーン一杯分食べさせられて、あまりの辛さに魔法で暴れようとしてしまったのだな。」

「確か、マコトの慌てた声が聞こえたと思った瞬間、視界が暗くなっていたな。多分マコトが眠らせたのだな。少々手馴れている感じがするが……。」

「気絶させられたにも関わらず、全く体に違和感を覚えないことからそんなことを思う。気絶させることに慣れているということは、まさか……マコトは殺し屋なのか!？」

「何と言っことだ……。これからどう接すればいいのだ……。流石に殺し屋と気さくに話せるような凶太さは持ち合わせていないというのに……。」

「何考えてるか知らんが、違うからな?」

「!?!? ま、マコト!? いつからそこに……!」

「^{ハナ}最初からここにいたが?」

「突然不機嫌丸出しの声を掛けられ、私は慌てて声のした方へと顔を向ける……。というか、私が眠っていたベッドの隣で椅子に座っていたのだが。」

「幾らなんでも、私は魔王と言われるだけの實力はあるつもりだが、これだけの至近距離にいたマコトの気配を全く感じなかったの」

は一体……。彼が『魔術』とやらを使って気配を消していたとしても、それならば魔力の気配を感じるはずなのだ。だが、それすらも感じなかったというのは……。取りあえず余り驚いていても失礼だろうし、すぐさま表情を戻して気を取り直す。内心はまだびっくりしているが。

「心臓に悪いぞマコト。」

「お前なら大丈夫だ。絶対大丈夫だ。何が起こっても大丈夫だ。」

何故そこまで強調するのだ？ そこはかたなく侮辱されている気がするぞ。

だが、ここでそれを伝えてもどうせ聞いてはくれないのだろうな。悪いのは魔力球をリビングの窓へ放とうとした私なのだろうし。

思えば、私はここに来てから彼に迷惑をかけてばかりだ。ご飯をこ馳走になったり、面白いスライムを見せてもらったり、大雑把な励ましを貰ったりと、本当に良くしてもらっている。

なのに、私は何もせず『てれび』とやらを見ていたり、コダマと喧嘩してソファを破壊してしまったりと、本当に迷惑ばかりもたらしている。

う……。ダメだ。思考がネガティブになってしまっ……。

「？ どうした？ えらく表情が暗くなってるんだが……。」

「あ、いや……。」

これ以上彼に迷惑を掛けるのは流石にはばかれる。というか私の良心が持ちそうに無い。

「何でもない。少しくらくらするだけだ。」

「え、マジ？ あつれおつかしーなあ……。そんな強く狩らなかつたんだが……。出力強すぎたかな……。」

マコトは私をごまかしのために言った体調不良について聞くと、何やらぶつぶつと呟いてる。というか、出力というからには何かしらの魔術を行使したのか？しかし、気絶だけを目的とした術なんてあるのだからか。少なくとも、気絶だけの代物なんて私の魔法でも無いな。

「ん〜・・・、そんなきつい後遺症は無いと思うけど、他に悪いところは無いか？」

「い、いや・・・。特には・・・。」

「そつか。一応加減したんだけどな、悪い。」

「か、構わない。元々悪いのは私なのだしな。」

仮病なのにここまでかしまられたら私の良心が・・・。槍でグサグサ刺されるみたいに痛い。

く・・・。ダメージが大きくなってきた。話を変えないと仮病のことをばらしかねない。何か話題は・・・。

「そ、そういえばリンやコダマはどうしたのだ？ この部屋にはいないが。」

あれだけおもしろ・・・げふんげふん。酷い目に遭った2人はどこにいるのだ？ コダマには余り会いたくないのだがな。

「2人なら他の部屋だ。リンは何故か俺のベットじゃないと寝相が最高に悪くて困ったけどな。」

・・・リン、マコトのベッドの何が気に入ったのだ？ たかがベッドだろう。まさか匂いなどということは・・・無いと思うが。動物などではないのだし。

まあ……どうでもよいか。このベッドも何だかいい匂いがするしな。

「無事ならば良い。私は死ぬかと思ったがな。」

「……ワサビを直にスプーン一杯食わされりやそうなるわな。」

「一つ聞きたいのだが、ワサビはあのようにして食すものなのか？」

「全く違うぞ。本来は食いモンに少しだけつけて味を引き立てるものだ。」

そ、そうだったのか……。アマテラスがやけに綺麗な笑顔で「このように食べるのです。」などと言って口に突っ込んできたので不審に思っていたのだが、よもやこれほどきついものだったとは……。

「うう……。もう緑色の塊は見たくないぞ……。」

「まああんな目にあつたらそうなるわな……。」

そんな哀れむような目で見ないでくれ……。物凄く惨めに感じてしまうぞ……。

マコトは目を合わせようとしない私を見て一度大きく息を吐くと、少しだけ笑みを浮かべて脚を組んで椅子の背もたれに体重を預ける。

「ま、そんだけ喋れるんなら大丈夫かな。」

そう言うと、マコトは立ち上がって私の頭に軽く手を乗せてきた。……何だか子供扱いされているようで少々気に食わないが、マコトの手が暖かくて心地いいから何も言わないでおく。

「それじゃ、俺は2人を見てくつから、何かあつたら呼んでくれ。」
「……分かった。」

「そいじゃな。」

マコトは私の頭から手を離すと、ニカッと笑って手を振りそのまま部屋を出て行った。私はマコトが出て行くまで手を振っていたが、彼が部屋から出ると手を下げ先ほど手を乗せられたときのことを思い返す。

特に秀でた外見をしている訳でもないのに、彼の手はまるで何重にも巻かれた針金のような力強さを感じた。それでいて、人の温もりをしっかりと感じ取ることのできる体温。全てが私を安心させてくれた。

(・・・本当に、この世界に呼んでもらったのは幸運だったのだな・
・・・)

改めて、自分がどれほどの幸運に恵まれていたのかを痛感するな。いつか何らかの形で恩は返さなければならぬが、どうすればいいのか・・・・良い案が思い浮かばん。

・・・今は休むか。
名案も浮かばないので、今はこの良い匂いのする枕を堪能することにしよう。

うっっん・・・・。眠い。今日は猛烈に疲れた。

もう外は真つ暗。確か明日は普通に学校だしそろそろ寝たいんだが、まだ根回しが整ってないんだよな。ほら、パミラとかリソって異世界の間人だからさ、戸籍とかどうにかしないと駄目じゃん？ 今それをどうにかしてるんだよ。

方法？ それは聞いてちゃいけない。聞いたら黒服のおじさん達に連れてかれることになるぜ？ ホントだぜ？

そのとき、ポケットに入れていた携帯に着信が。確認すると、さっき俺が頼み事をしたヤツからの電話だ。

「・・・もしもし。」

『いようブラザー 随分と疲労困憊みたいだな大丈夫か生きてるかー
ー！！！！』

「まあ、な・・・。」

電話口からは、こんなクソ暗い夜中に関わらず元気な上に全く息継ぎ無しのトークが垂れ流されてくる。あぶね、携帯握りつぶすところだった。

心中では、「一言目で心配されるとか頼むから遠慮したいマジへこむから」とか「うるせえ黙れ殺すぞこの 野郎」などへこんでるんだかバイオレンスなんだか分からないことを思ってたりするが、心の中で頭を抱えつつも何とか口を滑らさないようにできたわ。後で自分褒めとこ。

「んで？ 頼んどいたことは？」

『オーケーオーケーオイラに任せれば大丈夫だぜブラザー！！』

「それは分かってるから。だからこっちの」

『オーノー！ ブロウはオイラの腕をホントは疑ってるんだらうー？ じゃなきゃここまで言うてくることはナツシングだロー？』

「いや疑ってないって。結構重要なことがだから手早く欲しいんだよ。」

『イーからイーからーテリーを信じてくれよマイブラザー!』

・・・こいつがこうやってやたらと人の神経を逆撫でて時間を稼いでるときって確か・・・。

「・・・ハイブラザー。一つ聞いて良いか？」

『ノンノンノンミーはとても忙しーいから聞けませー』

「まだできてないだろ。戸籍作るの。」

『・・・・・・・・・・。』

ほら黙り込んだ。このバカ、こうやっていつつも先延ばしにしようとしてくるんだからな。いい加減騙されるか。

俺はちょこーつとお灸を据えてやるうかと思いつき、普段は滅多に使わない低ーい声を使って電話越しの相手に話しかける。

「おいジェイル。」

『な、なんだいブロウ・・・?』

心なしか、電話口の相手である元天才ハッカーにして現在フリーの情報屋をしている黒人の魔術師、ジェイル「レツカスの声が震えている。アレ、そんなに怖いのか俺の低い声? 前に絡んできた不良にコレ使ったら失禁してたけど。」

「別に遅れてもいいから、誤魔化そうとしないでくれ。いいな？」

『イエスサー・・・・・・・・。』

その後しばらく話を聞いてみて、どうやら元々『存在すらしていない人』の戸籍を作るのは腕利きの情報屋であるジェイルでも大変らしい。住民票の作成や個人情報情報の偽装やらなにやらまで行っただか

ら当然か。

明日には仮のものができるそうなので、取りあえず誤魔化そうとしたことは不問にしてやるう。あんまり苛めるのも趣味じゃないし。

「それじゃあ必要な書類は明日ウチに送ってくれ。」

『オウケ〜イ明日には必ず完成させるから待っててねー!』

「・・・エセ外人風かただのテンション高いバカかどっちかにしろ。両方だと正直メンドイ。」

「それは酷（ブチ。）」

もうこれ以上アイツの息継ぎ無しフレスレストラックの台詞は聞きたくなかったんだ。ただでさえ携帯握りつぶさないように気をつけてたのに、このまま聞いてたら液晶画面にヒビ入れちまう。

「ってよく見たらもう手遅れじゃん!! よくヒビ入ったまま通話できたなコレ!？」

画面ヒビ入ってた。やべーよコレ使えっかな。水没させたわけじゃないし大丈夫だといいんだけど・・・。今一応問題なく写ってるから大丈夫か？

「・・・ハア・・・。もう寝よ・・・。」

魔術で修理することもできるが、正直メンドイ。夜中にやると迷惑だし、そんな頻繁に魔術使っているとどっかの魔術機関に目え付けられるしな。

今日は早く寝て、明日に備えよう。どうせ明日も大変なんだろうし。俺は寢床をリンに取り立てられてるんで、仕方なく一階の和室で眠ることに。この時期は涼しいからいいけどね。

んじゃ、お休み〜・・・。ん？ あそこになんで兄貴がい

第十一話：誰かがハッピーだと誰かがアンハッピー。（後書き）

作者：ここに出るの久しぶりだな。

繰子：アナタめんどくさがってあとがき書いてなかったものね。

作者：アツハツハ。言わないで。

繰子：笑って誤魔化さない。

作者：分かったから鉄扇なんかで殴らないで！！ 頬が抉れるかと思っただぞ！！ てかどこから出したんだ！！！！

繰子：細かいこと気にしていると長生きできないわよ。

作者：分かったもう聞かないから鉄扇構えないで！！！！

繰子：で？ ココで何するのよ。ぶっちゃけ書くことないんでしょ？

作者：一応あるって。 これからもこの作品もよろしくお願いします。

繰子：まさかそれだけじゃ……。

作者：……。 （冷や汗ダラダラ流してる。）

繰子：……。 （静かに鉄扇を取り出す。）

作者：……。 （その場から逃げ出す。）

繰子：待ちなサーイ！！！！

第十二話：世にも奇妙な友人たち。（前書き）

・・・最早何も言いません。
ただ黙って土下座します！！

第十二話：世にも奇妙な友人たち。

「ふああ……。本日は晴天なりってか……？」

眠気に襲われ大きな欠伸をしながら、俺は雲ひとつ無い空を眺めてそんなことを漏らす。いや晴天は結構好きなんだよ。ただなあ……昨日あんだだけ面倒ごとがあつたのに、こんな晴れてつとなあ……。何かむかつく。

現在は午前8時。俺はいつも通つてる道を歩きながら高校へと向かつてる所だ。若干寝不足で機嫌悪いがな。

リンとパミラには朝食後に家でじっとしてるように言っておいたけど、ちと不安だ。何せ魔王と勇者だからな。帰ったらいらねえトラブルをごっそり持ってきてたなんてことが……。ありえそうだし、すげえありえそうだし。

（1時間前）

「ふあんふあつふえ？（訳：なんだって？）」

「……ひひんふおふおるふはんひへふへつふえ（訳：きちんとお留守番してくれって。）」

「2人ともモノ食いながら喋るな。」

きたねー上になんて言ってるか全く分からんぞ。

「俺はこれから学校に行くから、その間家から離れたりすんなよ。つったんだよ。」

「むう、それではつまらんぞ。」

「・・・周囲の確認を・・・。」
「留守番シテロヨ？」

あんまりにも言うこと聞かないんで、仕方なく笑顔で拳を構えて軽く脅しました。額に青筋のおまけ付き。2人はもう高速で頭を縦に振ってる。最初からそうしてくれりゃあいいのによ・・・。

「ま、帰ってきたら街の案内してやつから、それまで大人しくしてくれよ。」

「本当か!？」

「・・・嘘じゃない？」

「マジだつて。これからここで暮らしてくんだから、街がどんなもんか把握してもらわないとこっちが困っちゃうしな。」

そう言うと、2人はもう喜色満面つつー顔をこっちに向けてくる。やっぱ2人も女の子なんだな。笑顔を見てつい可愛いと思ってしまうた。

そんな内心を隠しつつ、俺は2人に苦笑を返す。

「そんな大げさに喜ぶほどでもないぞ。買い物ついでに街ん中ここれから世話になりそうな建物見るだけなんだし。」

「その通りだ。あんな空気の汚れた場所に出るより、2人とも私の部屋に来て・・・。」

「嫌だ。」「嫌。」

会話の途中でいきなり入り込んできて自分の部屋に招待しようとした兄貴は、光よりも早く2人に却下されてた。あ、コラ箸を落とすなよ兄貴。

「な、何故かね・・・？」

明らかに傷ついてますといった感じの兄貴は、それでも何か気力のようなモンを搾り出して理由を尋ねた。ラミアは普通にメシを食いながら、リンは箸を一旦置いて首を傾げながら2人とも少しの間考え込んでから答えを出した。

「騒来の部屋はあまり面白そうに思えんのでな。」

「……生理的に無理。」

「ちよと待って！？ ラミアさんはいいとして、リンちゃん酷すぎじゃない！？ 何『生理的に無理。』って！？ どこぞのブリーフ脱ぐ芸人さんじゃないんだよ！！？？」

「騒兄突っ込みが長い。リンはそんな言葉使わないの。無視するか、言うならもつとソフトに言ってやれ。……ラミアは何食わぬ顔で炊飯器の米をごっそり持っついていこうとすんな。」

「む。バレたか。」

炊飯器の中から中に入っていた米だけをく浮かせて>いたラミアは、バツが悪そうに舌を出すと大人しく米を戻す。んな目立つことやっててバレないとも？

「良いではないかマコト。私はまだ食べ足りんのだ。」

「……さっきからずっと思おうと思って我慢してたけど言うな。」

お前とリン食い過ぎなんだよ！！ 12人前分さっき炊いたのにもう半分以下じゃん！！ お前らフードファイター！？」

そう、この2人物凄く大食漢なのだ。既におかずは焼き魚が冷蔵庫から消失しており、惣菜も消えている。味噌汁はインスタントの物が残っていたので辛うじて残っており、最早味噌汁だけで食ってる状態だ。なのに何でさらに食が進んでいるんだろ……。。

「・・・真のご飯美味しいから。」

「米も味噌汁も俺の手作りじゃないぜ!？」

「マコト、おかわりが欲しいのだが。」

「お前は俺の話を聞けよ!! 食い過ぎだっつってんだろ!!?」

「・・・私も。」

「そんな保護欲掻きたてられる様な上目遣いで見て来ても両手に持つてるとんぶりが全部台無しにしてんだよ!! てかりんも話し聞いてよ!!???」

ギャーギャー言いつつもおかわりを入れてやる律儀な俺。こうして、結局俺が登校するまでの間に我が家の炊飯器からお米が消える羽目になりました。

「・・・無視しないで。」

涙目の騒兄は放置です。絡んだらロクなことにならない。

・・・てな感じの朝でした。さ、回想も終わったしとっとと学校へ行くか。

「・・・。」

「・・・。」

「……………」

「……暇だ。素晴らしく暇だ……」

私ことパミラは、マコトに言われたとおりマコトの家で大人しくしている。性格に言えば、ゲルとリンとともにテレビを見ているのがな。

リンは私が寝転がっているリビングで一番大きいソファとは別のソファに座っていて、ゲルは私の腕の中でうにゅと動いている。ああ、この感触がたまらん。

そのとき、ゲルが突然藍色のグミのような弾力を持つ体から触手を1本だけ出し、テーブルの上に置かれていたボールペンを取ると同じくテーブルに置かれていた手帳に何かを書き込んでいく。

<ボ・ス・ケ・テ。> 物凄くヨレヨレの字。

『……………』

何と返せばいいのだろうか……。というかボケれる気力があるのなら逃げればいいのではないのか……。思わず私とリンは固まってしまうたぞ。

本当に助けを求めているのか疑いたくなるメッセージに、思わず硬直してしまった私とリンだが、先に復活したのはリンだった。

「……レスキュー。」

そう呟いたリンは、立ち上がって私の寝転がっているソファに近づいて段々と動きが鈍くなってきているゲルを引っつかんで私から奪い取るうとする。む、そうはさせるか。

私は両手で引っ張っているリンへ向けて、でこピンを放った。

「……」【ピシッ】

「あつ。」

手が塞がっていたため防御することができなかったリンは、可愛らしい声を上げてゲルの体から手を離れた。そしてそのまま床へと座り込んで額を押さえている。

アツハツハ。この私の得意技であるく破山はの一撃>(魔力を込めたただのでこピン)を食らったのだ。そのくらいの反応は当然だろう。単なる魔力で強化されたでこピンだがな。

「……………」

リンは微かに涙目になっていて、額に手を当てたまま私を睨んでくる。どうやら怒っているようだ。まあ突然でこピンなんぞされれば誰でもムカツとするか。

ここは普通私が謝るべき場面なのだろう。だが、私はあえて挑発的な笑みを顔に浮かべてリンを見つめる。すると、リンは一瞬私の意外な行動に驚いたようだが、すぐに私の狙い通り目つきを鋭くして臨戦態勢に入る。

自分でも何故こんなことをしているか少々疑問に思っているが止められそうにない。ただ、何故かリンに対してイニシアチブを取っておかないと後々面倒なことになる、そんな気がするのだ。

「どうした？　そこで何も出来ない子供のよう蹲っているだけか？」

「……………上等。」

リンの方も私と似たような思いを感じていたのかもしれない。簡単な挑発に乗って、片手に魔力球を展開させて立ち上がってくる。闘る気マンマンだな。

ならば、こちらの手を抜かずに行くか。私は手足に魔力を通わせ、

いつでも暴れられるように準備する。

「安心しろ。死なない程度には手加減しよう。」

「・・・舐めるな・・・!」

リンの静かだが良く通る怒声を合図に、私の拳とリンの魔力球が激突した。

ゾクッ・・・。

「な、何だ？ 寒気が・・・。」

まだ集まりきっていない教室で窓からの景色をボケーっと眺めていると、突然背筋を寒気が襲う。・・・すっげえ不吉な予感を感じる俺。

ヤバイ、俺の見てないところで絶対何か悪いことが起きてる。しかも俺だけ苦勞するようなことが。

「うう・・・。帰りたくなってきた・・・。」

今日もトラブルが発生することを確信した俺は、机に突っ伏して誰にも聞こえないよう小声で嘆く。泣いてはいないぞ!・・・心中

ではなきそうだけど。

そのとき、不意に俺の席へと誰かが歩いてくる。顔を向けてみると、どこか柔らかな雰囲気醸し出している中性的な顔立ちの男子がこちらへやってきていた。

「どうしたヌラ？ 今日はまだ随分テンションが暴落してるヌラ。」

「・・・ヌラっち・・・。」

俺がヌラっちと呼んだクラスメイトの男子

俺のクラスの

男子委員長であり、友人でもある一藤堂ヒオは、世にも奇妙な語尾をつけながら俺に話しかけてくる。

「そんな顔してたら良いことも避けていってしまうヌラ。ホラホラ笑顔笑顔ヌラー！」

「や、止めるバカ！！ 手で無理やり笑顔を作ろうとするな！！」

野郎に顔触られて喜ぶ性癖は俺には無い！！

やたらとしつこく伸ばしてくるヌラっちの魔手を、若干やり過ぎなレベルの威力で叩き落としていると、ようやく諦めてくれた。

「うう・・・酷いヌラ。ヌラはマーコを元気にさせようとしただけヌラ・・・。」

「ならもう少しまともな方法をやりやがれ！ 後そのあだ名止めるつつってんだろ！！」

俺は女か！？ そんなんだから一部の女子の間で俺とヌラっちがカップルだなんて噂が立つんだよ！！ ほらそこでなんかヒソヒソ言ってる女子いるし！！

だがヌラっちは俺の心配なんてどこ吹く風。暢気に手を叩いていく。

「おおマーコが元気になったヌラー。良かったヌラー。」
「俺の話聞いてないな!? そうなんだな!?」

それは俺へ喧嘩売ってるって認識していいんだな!? 今なら買うぞ!? 法外な値段でも即買うぞ!?

他人の意見を全く聞かないヌラっちにマジギレし勢いよく席を立つ。驚いている拳骨を繰り出すかチョップにするか頭蓋骨をへこますでこピンを繰り出すか迷っていると、突然肩に手を置かれた。 うお!? 誰だ!? 気配感じなかったぞ!?

「……………」

「キャンドルヌラー。 おはようヌラー。」

ヌラっちが相変わらず暢気に、俺の後ろにいた顔色が真っ青な眼鏡を掛けた男子生徒に挨拶をする。俺の肩に手を置いていたのはこいつだ。

「お、おはようさん……………」

「……………はろー。(ボソツ)」

俺が引き腰になりつつも挨拶をすると、葬野は俺の肩に手を置いたままかろうじて聞き取れるぐらいの声で挨拶を返してくれる。 基本はいい奴なのだ。

キャンドルと呼ばれたこいつは葬野そしのあおまつ蒼松。 つねに顔色が病人のように悪いという夜中に会いたくない奴だ。 ぶっちゃけ昼間でもたまにビビる。

キャンドルというのはヌラっちが付けた葬野のあだ名だ。 ……まあ肌色からして蠟燭っぽいけど、これはないだろう。 因みにそう反

論したら、『じゃあ幽霊又ラ。』なんて言いやがったからキャン
ルで勘弁してもらった。

「……だって幽霊なんてあだ名になったら俺はこいつを直視でき
なくなる。怖くて。」

「……喧嘩はダメだ。」

「い、いや違うって。」

何故か他人を叱るときだけ葬野はやたらと力の籠った声を出す。根
が優しいやつだから、友達が喧嘩してるのが許せないんだろう。
仕方なく、俺は矛を仕舞って自分の席へと座りなおした。殴られ
ずにすんだ又ラっちは葬野を拜んでいやがる。やっぱ殴らせて……。

「……。」

「もうしねえって！ だから睨むの止めてくれ葬野！！」

無言のままプレッシャーをかけてくる友人によって又ラっちへの報
復は阻まれることになってしまった。……だって怖いんだもの
！！

その後、何だかんだで仲の良いこの3人でしばらく話をしていると、
今度は児玉が教室へと入ってきた。児玉は2人と雑談してる俺の
方を見ると、一直線に寄ってきた。

「おはようマーくん！！」

「お、おお。……って何で抱きついてくるんだよ！？」

「えへへー。いい匂いですー。」

「お、おい当たってる！ 当たってるって！！」

「おおー。タマちゃん大胆又ラー。」

「出来れば助けてほしいんだが！？」

「・・・頑張れ。」

児玉に何故か抱きつかれる。女の子に乱暴な真似をするわけにもいかず、されるがままに抱きしめられたりにおいを嗅がれたり。又ラっち、感心してんじゃねえ!! 葬野は親指立てんな!!

結局HRが始まるまで児玉は離れてくれず、それまで又ラっちと葬野を除いた周囲の男子から恐ろしい目で睨まれる羽目に。

・・・もう精神的にキツイ・・・。

第十二話：世にも奇妙な友人たち。（後書き）

風邪を引いて寝込み、父の通院に付き添い、自動車学校で仮免を滑る……。

何か悪いことしたんか俺————!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6173e/>

呼ばれて飛び出た魔王です。（勇者付き）

2010年10月8日22時21分発行